

金山遺跡（第2・第3次調査）

—快速で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道明野間々田線武井工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団

金山遺跡（第2・第3次調査）

—快速で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道明野間々田線武井工区に伴う発掘調査—

2016. 3

栃木県教育委員会
公益財団法人とちぎ未来づくり財団



第3次調査 SK-6 出土のカワラケ

序

金山遺跡は、栃木県南部の小山市に所在する古代から中世を中心とした集落跡です。この遺跡については、国道新4号バイパス建設に伴い昭和60年から平成3年にかけて第1次調査が行われ、「金山」と刻された平安時代の土器の発見により、この地が約1,200年前から既に金山と呼ばれていたことなど、地域の歴史解明に資する大きな成果が得られました。

この度、県道明野間々田線の道路拡張工事に先立ち、路線内に所在する遺跡の取扱いについて、関係機関と協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

本報告書は、平成25年度（第2次調査）・同27年度（第3次調査）に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。本書が県民の皆様に、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、御協力をいただきました栃木県国土整備部、小山市教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

栃木県教育委員会

教育長 古澤利通

例　言

- 1 本書は、栃木県小山市東野田地内に所在する金山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査の事業名称は「金山遺跡発掘調査（安全な道づくり事業費（補助）主要地方道明野間々田線武井工区に伴う発掘調査）」である。
- 3 調査は、栃木県より公益財団法人とちぎ未来づくり財団へ業務委託され、同事業所の埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本遺跡の現地調査及び整理報告作業期間は以下の通りである。

第2次調査 発掘調査

期　間 平成 25 (2010) 年 8月 1日～平成 26 (2011) 年 3月 27 日

担当者 副所長 初山孝行

整理課副主幹兼課長 田代 隆

調査課係長 植木茂雄

整理課副主幹 津野 仁

整理課嘱託調査員 永井三郎

調査課嘱託調査員 市川岳朗

第3次調査 発掘調査・整理作業・報告書作成

期　間 平成 27 年 (2015) 年 7月 1日～平成 28 (2016) 年 3月 30 日

担当者 整理課副主幹 篠原祐一

調査課嘱託調査員 囲山亮子

- 5 本書に係る整理作業・報告書作成は篠原が行った。又、第二章は岡山亮子、縄文土器の記述は普及課係長 亀田幸久と協議の上、整理課係長 江原 英が担当した。須恵器産地及び年代は津野、中世陶器カワラケの年代は初山に拠る。
- 6 発掘調査・報告書作成にあたっては、小山市教育委員会から御助言・御協力を賜った。
- 7 発掘調査の参加者は、次の通りである。
工藤忠孝・小関英夫・齊藤 篤・西村正子・信末 晓・間澤 晓・望月明美・山中部男・山中喜美子・山中トヨ子・吉田晴美
- 8 整理・報告書作成作業の参加者は次の通りである。
田村範子
- 9 遺物の洗浄・接合・復元・図面の清書（デジタルトレース含む）は、篠原が実施した。
- 10 本遺跡の調査概要是、埋蔵文化財センター年報・栃木県埋蔵文化財保護行政年報で報告されているが、本書をもって正式報告とする。
- 11 本遺跡の出土遺物・図面写真等資料等については、栃木県が保有し、栃木県埋蔵文化財センターに保管、公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センターが管理している。

凡　例

1 遺跡

- (1) 遺跡の略号はOHK (OYAMASHI-HIGASHINODA-KANAYAMA) である。第2次調査、第3次調査の別を明示するため、第2次調査に「-2」、第3次調査に「-3」の枝番を付加している。
- (2) 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所が用いるSA (塹・槽列)・SB (建物)・SC (回廊)・SD (溝)・SE (井戸)・SF (道路)・SI (住居)・SK (土坑) に準拠する。
- (3) 遺構の縮尺は挿図中にスケールで示した。
- (4) セクション図の数値は線上が標高を示す。
- (5) 方位は国土方眼座標に據っている。

2 遺物

- (1) 実測図は三分の一縮尺である。
- (2) 挿図中の遺物番号は、写真図版に対応する。
- (3) 遺構間で遺物が接合した場合は、時期が新しい遺構もしくは近接する遺構に記載した。
- (4) 作図にあたっては、以下の点に留意した。
 - ① 実測方法は四分割法を用い右側二分の一には内面と断面、左側には外面を記録した。
 - ② 残存率の良いものは土器の状態を忠実に示すため割付実測を行い、欠損部分についてのみ復元もしくは反転して作図した。
 - ③ 残存率の悪いものは、土器の中心を算出し、反転復元して作図した。この場合、反転に伴い左右の外形線は同一、併せて稜線も直線で表現している。
 - ④ 沈線や強い稜線・くびれ・脚(台)部の境等は実線で表現した。
 - ⑤ 断面図内の線は、粘土組や脚(台)部等の接合を表現する。なお、表記のないものには、観察上明確に接合部が特定できないものも含まれている。
- (5) 遺物観察表中の胎土は、肉眼観察で土器全体に占める砂粒の粗密によって多い・少ないであり、一定面積内の含有量を定めた基準を設けたものではない。
- (6) 焼成は、三段階に分け、土師器の場合、硬質感のあるものを良好、通常認められる程度のものは敢えて明記せず、胎土粉が手に付着するなどの状態のものを甘いと表現した。
- (7) 土器の各部位呼称は、『日本土器事典』(大川清・鈴木公雄・工芸普通編 1996 雄山閣)に準拠している。

目 次

序文	i
例言	iii
凡例	iv
目次	v
第一章 調査の経緯	1
第一節 調査に至る経緯	1
第二節 調査の方法	1
第三節 調査の経過	2
第二章 遺跡の環境	3
第一節 地理的環境	3
第二節 歴史的環境	4
第三章 遺構と遺物	7
第一節 第2次調査区の概要	7
第二節 第3次調査区の概要	7
第三節 第2次調査区	8
第四節 第3次調査区	19
第五節 編文時代の遺物	29
第四章 調査の成果	31

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 周辺の遺跡	6
第3図 第2次調査区全体図	8
第4図 第2次調査区 SI-1 実測図	9
第5図 第2次調査区 SI-6 実測図 1	10
第6図 第2次調査区 SI-6 実測図 2	11
第7図 第2次調査区 SI-18 実測図	12
第8図 第2次調査区 SI-17 実測図	12
第9図 第2次調査区 S B・S D実測図	14
第10図 第2次調査区 S E・S K実測図	16
第11図 第2次調査区 S K実測図	17
第12図 第2次調査区 S K・表面採集遺物実測図	17
第13図 第3次調査区全体図	19

第14図 第3次調査区 SI-22・SK-6 実測図1	20
第15図 第3次調査区 SI-22・SK-6 実測図2	21
第16図 第3次調査区 S K実測図1	24
第17図 第3次調査区 S K実測図2	26
第18図 第3次調査区 4区実測図	28
第19図 金山遺跡出土繩文土器	29
第20図 金山遺跡全体図	30

図版目次

巻首図版

- 図版一 金山遺跡 遺構
- 図版二 金山遺跡 遺構
- 図版三 金山遺跡 遺構
- 図版四 金山遺跡 遺構
- 図版五 金山遺跡 遺構
- 図版六 金山遺跡 遺構
- 図版七 金山遺跡 遺構
- 図版八 金山遺跡 遺構
- 図版九 金山遺跡 遺構
- 図版十 金山遺跡 遺物

第一章 調査の経緯

第一節 調査に至る経緯

小山市南部は、工業団地をはじめ、多様な商工業施設が展開を見せている。これに伴い生活上の幹線道路へ大型車・商用車の利用が広がり、必然交通量は増加する状況となった。特に、一般国道新4号バイパスの建設は、新しい交通網の広がりをもたらし、周辺県道等への車両流入は顕著となってきていている。

一般国道50号以南の一般国道新4号バイパスの建設にあたっては、横倉遺跡・横倉戸館遺跡・横倉宮ノ内遺跡・田間東道北遺跡・西裏遺跡・塙崎遺跡・金山遺跡・大境遺跡の発掘調査が行われた。当該調査に係わる金山遺跡は、昭和60年度から平成3年度にかけて第1次調査が実施され、古墳時代から平安時代、中世を中心とする集落跡であることが判明した。

今回の第2次・第3次調査は、一般国道新4号バイパス東野田交差点で交わり東西走向する県道54号線(明野・間々田線)拡幅工事に伴う事前発掘調査である。同県道は、特に大型車の通行が顕著で、車幅一杯に擦れ違う状態である。周辺には、小山市立大谷南小学校があり、登下校の児童が路肩を班通学している。また、近隣住民の生活にも安全が求められる状況にある。これらに鑑み、歩道の整備が実施されるもので、必然発掘調査面積も、歩道幅となる。

第2次調査は、平成25年7月31日付で発掘調査に係る費用見積の依頼が栃木県教員委員会事務局文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長宛にあり、7月31日付で回答、8月1日付で委託契約の締結がなされた。期間は契約締結日(8月1日)から平成26年3月27日まで、委託料は7,659,000円(うち消費税及び地方消費税の額364,714円)であった。調査開始後、現県道下の調査部分の掘削が深く及んでおり、埋蔵文化財が湮滅していることが判明した。これを受けて、その部分の調査が不用となり期間等を縮減することとなった。そのため9月30日付で委託料を6,423,000円(うち消費税及び地方消費税の額305,857円)に変更契約した。

第3次調査は、平成27年7月31日付で発掘調査・整理作業・報告書作成に係る費用見積の依頼が栃木県教員委員会事務局文化財課長から公益財団法人とちぎ未来づくり財団理事長宛にあり、8月3日付で回答、同日付で委託契約の締結がなされた。期間は契約締結日(8月3日)から平成28年3月30日まで、委託料は12,202,000円(うち消費税及び地方消費税の額903,851円)であった。

第二節 調査の方法

第2次調査は、試掘坑で遺構を確認した西側のトレーンチ調査区と、対象区幅まで調査する東側の主調査区に二分し、現道路部分の調査は第1次調査区に近接した主調査区東端の北に設定した。

第3次調査は、第1次調査区に近い西から東に向けて加算し4区までの区割りとした。各調査区は生活道路や工場等の出入り部分を残すことで境とし、東は台地が谷部に向かう緩斜面までとした。

各現地調査は、重機による機械掘削で遺構確認面を捉えた後は、すべて作業員による手作業で実施した。表土除去後は断面掛け→遺構確認→遺構半数若しくは土層観察帯を残した掘り下げ→土層断面確認→土層断面図作成→土層断面写真撮影→遺構掘り下げ→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況平面図作成→遺物取り

上げ→遺構完掘→遺構平面図作成の手順を基本として作業を行った。遺構平面図作成は、測量業者に委託し、航空測量を中心に実施した。

整理作業は、平成 27 年 10 月、報告書作成は平成 28 年 2・3 月に実施した。遺物の洗浄は、バンクブラシを使用し、接合はセメダイン株式会社製セメダイン C を使用した。遺物は完形に復元することを行わず、補強することで保存を図った。補強は、セメダイン株式会社製セメダイン・ハイスパー 5 を使用した。また、図面は、第 2 次調査区が平板測量であり、時間的制約から図面に世界測地系座標を入れる状態では無かつたため、作成図面の補足を測量業者に委託した。併せて、旧座標値及び東日本大震災以前調査が行われた第 1 次調査区の全体図を補正し、第 2 次・第 3 次調査区と齟齬のない状態の金山遺跡全体図を作成した。

遺物実測は手作業とし、すべて寸実測図を作成した。遺物清書は、Apple 社製 Macintosh (Mac) X EI Capitan (Ver.10.11.3) のハード環境上で、アプリケーションに Adobe 社製 Illustrator CS5.1 を用い、コンピュータトレースを行った。遺構図は、測量結果として納品されたデジタルデータ平面図を Illustrator で修整・編集した。これらの作業の後、版組も Illustrator で行った。

報告書の文章作成並びに割り付け作業に当たっては、同様のハード環境の下、Adobe 社製 InDesignCS5.5 で行った。写真図版はすべてデジタル素材を使用し、Adobe 社製 Photoshop Elements Editor で画像処理を行った。また、報告書印刷後の保存データは、保存後のアプリケーション・バージョンアップに伴う変換不能リスクを鑑み、最終的には Adobe PDF (Portable Document Format) 及び JPEG (ジェイペグ、Joint Photographic Experts Group) に変換した。なお、JPEG は直近の利用のみを念頭としたもので、劣化リスクは PDF 保管を優先させた。

第三節 調査の経過

第 2 次調査は、平成 25 年に実施した。8 月 1 日は事務所・駐車場借地交渉を行い、8 月 5 日に表土除去作業施工業者と現地打合せを実施。8 月 7 日にトレンチ調査で遺構確認作業、8 月 8 日に作業員募集説明会、8 月 9 日の測量基準杭打設により発掘調査の準備が整った。8 月 19 日から 29 日まで、作業員による遺構確認・精査・図面作成・写真撮影等の作業を行った。9 月 2 日、現道路部分の調査実施を検討。9 月 6 日、現道路部分の調査を実施するが、地盤改良の掘削が深さ 1.3 m に達し、遺構は埋没していることが判明。9 月 10 日から 13 日は遺物洗浄作業。9 月 17 日から 24 日まで遺物注記作業。9 月 25 から 27 日に事務所等を撤去し、当該次の調査を終了した。

第 3 次調査は、平成 27 年に実施した。8 月 4 日から 21 日まで、書類等の事前準備。8 月 24 日、現場事務所の設置。8 月 25 日、作業員説明会及び安全帽の設置を行った。8 月 27 日・28 日は表土除去作業を実施し、発掘調査前段の作業を終えた。9 月 1 日から 25 日まで作業員による遺構確認・精査・図面作成・写真撮影等の作業を進めたが、9 月 7 日から 10 日は関東・東北豪雨にて作業中止。特に、9 日は近接する西仁連川が氾濫したが現場への影響は無かった。9 月 28 日に航空写真撮影、9 月 29 日・30 日、現場事務所撤収、9 月 30 日に現場を埋め戻し調査は終了した。

整理作業・報告書作成作業は、平成 27 年、平成 28 年に実施した。平成 27 年 10 月は、遺物洗浄・接合・復元、図面整理・写真整理を行った。平成 28 年 2 月から 3 月は、遺物実測、遺物実測図のデジタル環境上の清書、遺構図面等のデジタル環境上での修正及び清書、原稿執筆、版組を進め、印刷会社へのフルデジタル入稿、校正、印刷を経て 3 月 29 日付で報告書を上梓した。

第二章 遺跡の環境

第一節 地理的環境

金山遺跡は、栃木県小山市大字東野田字金山・大門前に所在する。今回報告する調査区は字金山775、1562番地に隣接した地点である。

小山市は栃木県の南部に位置し、茨城県の西端にあたる結城市と接している。また、南には野木町を挟んで茨城県古河市に至る。栃木県内は南北に多数の河

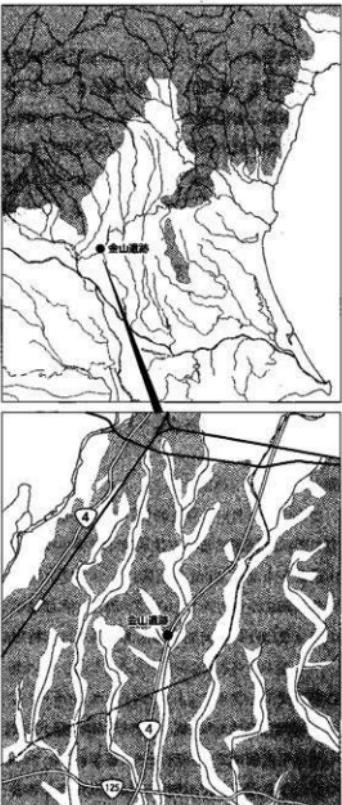
川が流れおり、小山市内では、代表的な河川として、思川や西仁連川が流れている。小山市の地形は台地と低地が存在する。小山台地は下野市石橋から小山市東部へと続く宝木段丘面に属する。市西部の低地は思川や巴波川によって形成され、小山台地も大川や西仁連川などによって開析され、幅200～300mの浸食谷が樹枝状に発達する。

当該遺跡がある東野田は、JR東北本線間々田駅の南東約4km、一般国道50号の南約5kmに所在しており、過去に発掘調査が行われているが遺跡の中心部は一般国道新4号バイパスが通っており、今回の発掘調査の原因でもある県道54号線の拡幅がされるなど交通の便が良い土地である。

北に田間、東に武井、南西に南和泉、そして西に東黒田の集落と隣接している。また南側は茨城県古河市に至る。金山遺跡は、南側に舌状に伸びる台地の東側中位面から大川によって形成された谷底平野に立地している。台地の東西幅は約500mで、今回報告する発掘調査地点での標高は約28mである。大川から東に約200m、西仁連川から東に1.7kmに所在する。

金山遺跡は東野田の中では、東北部に位置する。東西約400m、南北約1kmにわたる遺跡であるが、今回報告する発掘調査区は、金山遺跡の東端及び中心部よりやや西側にあたる位置である。

現況として、今回報告する発掘調査区は、道路及び宅地であり、過去に発掘調査を実施した地区は、一般国道新4号バイパスや宅地に開発されている。また未調査の地区は、宅地・畠に利用されている。



第1図 遺跡位置及び周辺地形図（1:25,000）
（『金山遺跡VI』を改変）

第二節 歴史的環境

概要

金山遺跡は、旧石器時代から中世・近世まで続く複合遺跡である。「小山市遺跡分布図・地名表」において市遺跡番号211番、規模が1000×400mの散布地で、縄文～平安時代の遺跡として記載されている。昭和60年から平成3年、平成7年から8年にかけて財団法人栃木県文化振興事業団が発掘調査をおこなっている。過去の発掘調査において多数の遺構の検出、遺物の出土がみられた。そのため、ここでは既報告の遺跡の概要及びそれに関連した周辺遺跡の様相について概観する。

旧石器時代

金山遺跡からは計13ヶ所の旧石器時代の遺物集中地点が確認されている。出土層位は、宝木ローム層上部の暗色帯から田原ローム層上部のソフトロームまでの4枚の文化層にわたっている。遺物は、ナイフ形石器や尖頭器などが出土している。ソフトローム上位では石器ブロック群と砾群が出土している。小山市内では小山台地上に旧石器時代の遺跡が立地しており、金山遺跡周辺では、八幡根東遺跡(7)、宮内遺跡(18)、塙崎遺跡(36)、そして前畠遺跡(43)において旧石器時代の遺物が確認されている。

縄文時代

金山遺跡においては遺構から出土する縄文土器は、前期の黒浜式の出土がほとんどである。遺構外からは、早期の燃糸文系・沈籠文系・条痕文系、前期の関山式・黒浜式・諸磯式・十三菩提式、そして中期に帰属する土器が出土している。西仁連川や大川流域の市内南東部は、金山遺跡で多く出土している黒浜式期の遺跡が多数所在している。金山遺跡の北東に位置する横倉宮ノ内遺跡(18)も同様に、縄文時代の遺構及び遺物は、黒浜式期のものがほとんどで、7軒の黒浜式期の住居が検出されている。一般国道新4号バイパスの開発に伴い発掘調査をおこなった塙崎遺跡からも2軒の住居が検出されている。

弥生時代

小山市内において弥生時代の遺構や遺物が検出することは少ないが、金山遺跡も同様の様相を呈している。弥生時代に帰属する竪穴住居は1軒のみ検出されている。住居からは、後期の二軒屋式が出土している。金山遺跡から北に2kmの田間においては小銅鐸が発見されている。小銅鐸の類例は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてみられるが、周辺に古墳時代前期の遺構が検出されているだけで遺構に伴って出土したものではないため、時期を特定することは困難である。

古墳時代

古墳時代においては、前期・中期の竪穴住居跡を検出されている。前期のS字甕が出土していることから関東甲信越地方と交流などの影響があったと考えられる。中期に帰属する遺構の中には剣形の石製模造品や原石から完成までの製作工程を復元できるような白玉の完成品や未完成品が出土している。小山市においては、他に西裏遺跡において白玉の製作住居跡が確認されている。小山市東部地域から結城市西部にかけては、石製模造品の製作が想定される遺構が確認されている地域である。その地域において製作された石製模造品

は、当時下毛野において最大勢力を保持していた宇都宮市南部地域の古墳被葬者層が消費していたとされている。

古代

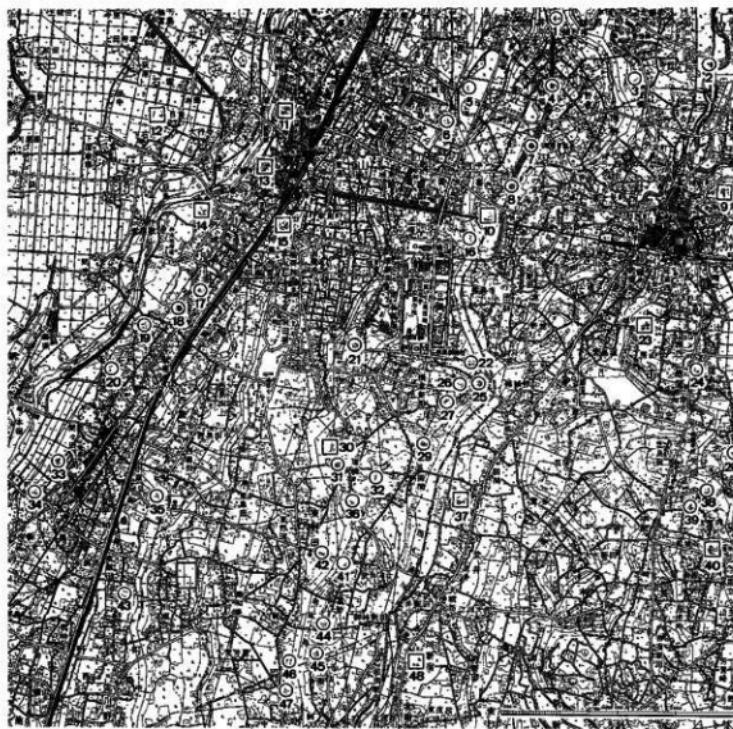
9世紀後半に帰属する鍛冶関連遺構が検出された。ここからは、鉄滓、鉄塊、羽合等の鍛冶関連の遺物が出土した。理化学分析により、金山遺跡における鍛冶作業は、鉄素材の粗鉄片造り及び廢鉄器素材を原料とした鉄器製作の鍛錬鍛冶であると考えられる。鍛冶関連の他には、鉄鉢形須恵器、瓦塔、鉄製鍵前や秤が出土している。特に鉄鉢形須恵器、瓦塔は仏教関連の遺物といわれている。瓦塔は、小山市においては伝河原遺跡、八幡根東遺跡より出土がみられる。

中世

中世後半の室町時代から近世初頭頃までの集落・水田・墓地が検出された。内訳としては、掘立柱建物や地下式坑、方形竪穴建物、井戸、そして区画溝等が検出されている。また集中的に墓坑とみられる長方形土坑がみられる箇所もあった。同様に地下式坑や土坑などが複合的にみられる中世の共同墓地は、横倉宮ノ内遺跡、田間東道北遺跡でもみられる。横倉宮ノ内遺跡は15～16世紀、田間東道北遺跡は14～15世紀に帰属する。金山遺跡の長方形土坑は16世紀～17世紀初頭頃を中心に造営されたと考えられている。各種陶磁器類が出土している。地下式坑からは刀装具が出土しているものもある。

参考文献

- 飯塚俊昭 1997『金山遺跡VI』栃木県埋蔵文化財調査報告第188集
- 池田敏宏 1999『関東地方瓦塔編年他地域瓦塔編年の比較・検討―関東地方瓦塔屋蓋部編年の検証作業を中心として』『研究紀要』第7号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小山市教育委員会 1977『小山市遺跡分布図・地名表』小山市文化財調査報告第4集
- 小山市史編さん委員会 1984『小山市史』通史編I
- 藤原祐一 1996『第4章 成果と問題点 第1節 西裏遺跡出土の石製模造品について』『西裏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第180集
- 藤原祐一 1997『栃木県古墳時代祭祀施設―祭祀関係遺物の出土から』『研究紀要』第5号 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1993『金山遺跡I』栃木県埋蔵文化財調査報告第135集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1994『金山遺跡II』栃木県埋蔵文化財調査報告第148集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1995『金山遺跡III』栃木県埋蔵文化財調査報告第160集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1995『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1996『金山遺跡IV』栃木県埋蔵文化財調査報告第集179集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1996『西裏遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第180集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1997『金山遺跡V』栃木県埋蔵文化財調査報告第集187集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1997『金山遺跡VI』栃木県埋蔵文化財調査報告第集188集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1997『横倉戸館遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第190集



1. 本郷前遺跡
2. 寺野東遺跡
3. 西の台遺跡
4. 向野原遺跡
5. 西山遺跡
6. 潟ノ台遺跡
7. 八幡根東遺跡
8. 八幡根遺跡
9. 結城城
10. 中久喜城
11. 紙面城
12. 石塚館
13. 長福城
14. 驚城
15. 神鳥谷曲輪
16. 下大塚遺跡
17. 宮内東遺跡
18. 宮内遺跡
19. 千鶴坂浅間遺跡
20. 牧ノ内古墳群
21. 宮遺跡
22. 横倉遺跡
23. 城の内館
24. 坡の上遺跡
25. 戸無古墳群
26. 横倉戸無遺跡
27. 横倉宮ノ内遺跡
28. 林古墳群
29. 田間東道北遺跡
30. 塚田館
31. 塚崎古墳群
32. 西裏遺跡
33. 乙女不動原遺跡群
34. 魚田遺跡
35. 六本木遺跡
36. 塚崎遺跡
37. 三藏寺社館
38. 旧祐城寺瓦窯跡
39. 結城魔寺
40. 東持寺館
41. 横向遺跡
42. 金山遺跡
43. 前畠遺跡
44. 稲穂田遺跡
45. 墓子尾遺跡
46. 大堀遺跡
47. 上片田B遺跡
48. 水書氏屋敷

第2図 周辺遺跡分布図（飯塚 1997 より転載）

第三章 遺構と遺物

第一節 第2次調査区の概要

本調査区は、一般国道新4号バイパスと県道54号線(明野・間々田線)が交わる東野田交差点の西に位置し、小山農業協同組合(JAおやま)大谷南支店の南に接する道路拡張区が対象である。明治12(1879)年に野田村から改称誕生した東野田村中心部の東部で、同村が占める台地の中央部分東寄りである。

調査は、三箇所の調査区に分離して調査を実施した。西半分に位置するトレンチで遺構確認した部分を「トレンチ調査区」と呼称し、遺構を多く確認したため調査対象範囲を全面に拡げた部分を「主調査区」、現道路下を発掘した「確認調査区」とした。その内、トレンチ調査区の中央東寄りの段となる付近を中心に攪乱が著しく、トレンチ調査区の大半から遺構は確認されなかった。確認調査区は、道路建設に伴う掘削により遺構は認められなかった。

確認した遺構は、トレンチ調査区から住居跡1軒、本調査区から住居跡3軒・掘立柱建物跡4棟・溝2条・井戸1口・地下式坑1基・土坑9口である。住居跡4軒の内訳は、奈良・平安時代が2軒、時期不明が2軒である。他の遺構は遺物の出土が無いものもあるが、概ね奈良・平安時代から中世の所産である。土坑には現代のものも含まれ、時期の特定可能なものは攪乱とせず遺構として扱っている。出土遺物は、奈良・平安時代の土師器鉢・壺・瓶、須恵器高台付壺・壺、中世の天目茶碗・擂り鉢、現代の湯飲み茶碗・麦酒瓶などである。また、遺構として捉えてはいないが、縄文時代前期の土器が出土している(SI-17が縄文時代住居跡の炉である可能性を持つ)。

第二節 第3次調査区の概要

本調査区は、一般国道新4号バイパス東野田交差点の東に位置し、東野田村の東端で、台地は水田面となる低地へ下る緩斜面にあたる。

調査は、生活道路及び生活建物等への出入りを考慮し、それらの部分を対象となる地権者及び樹木土木事務所立ち会いの下、発掘対象区から基本的に除外し、住居跡等の遺構が認められ必要が生じた際にのみ調査を実施することとした。そのため、調査対象面積は四つに分断されることとなり、西から1区と順次東へ加算する名称を付加した。

確認した遺構は、2区から住居跡1軒・地下式坑1基・土坑18口、4区から溝1条・土坑5口である。両区を合計し第3次調査としての成果は、住居跡1軒・溝1条・地下式坑1基・土坑23口である。住居跡は奈良・平安時代、地下式坑は中世、他の遺構は遺物の出土が無く時期不明であるが、概ね奈良・平安時代から中世の所産である。出土遺物は、奈良・平安時代の土師器塊・鉢・壺・須恵器蓋・壺、中世の天目茶碗・内耳土器・カワラケなどである。また、遺構として捉えてはいないが、縄文時代前期の土器が出土している。

4区の溝と土坑は、金山遺跡の集落範囲を区画する施設と見られ、本調査での大きな成果である。土坑は櫛列の杭跡とみられ、1.1m間隔で設置された杭列である。同時期で杭二本立の場合と、建替えで二時期の場合の可能性がある。時期は不明であるが、中世よりも古代的特徴があることから、金山遺跡の最盛期に区画施設が設けられていた可能性を示唆するものである。

第三節 第2次調査区

第一項 トレンチ調査区

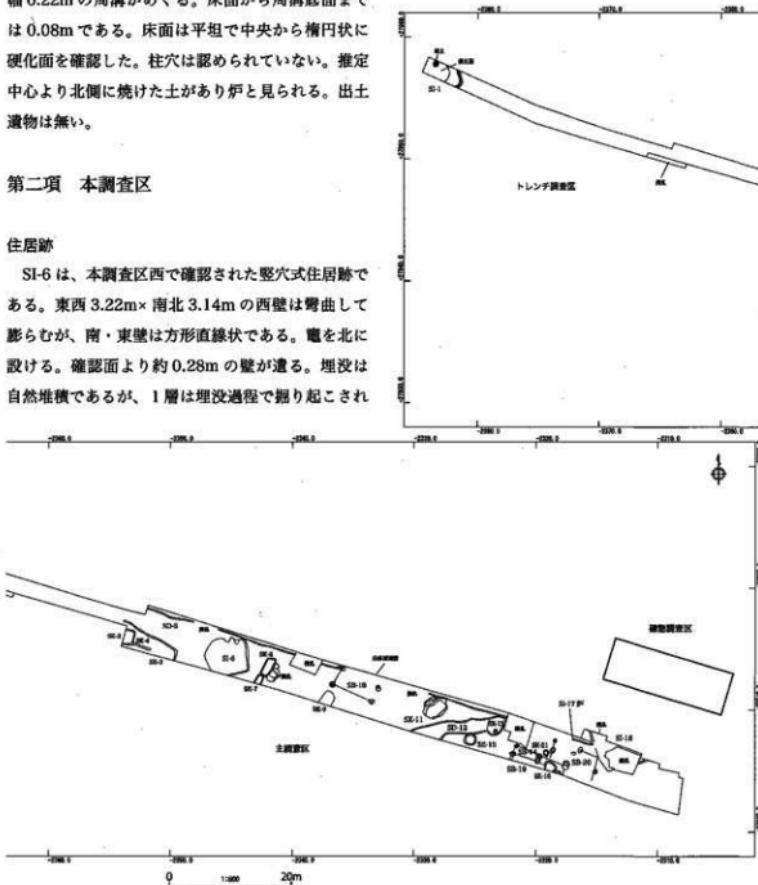
住居跡

SI-1は、トレンチ調査区の西端で確認された竪穴式住居跡である。確認面より0.45mの深さで壁が造り、幅0.22mの周溝がめぐる。床面から周溝底面までは0.08mである。床面は平坦で中央から楕円状に硬化面を確認した。柱穴は認められていない。推定中心より北側に焼けた土があり炉と見られる。出土遺物は無い。

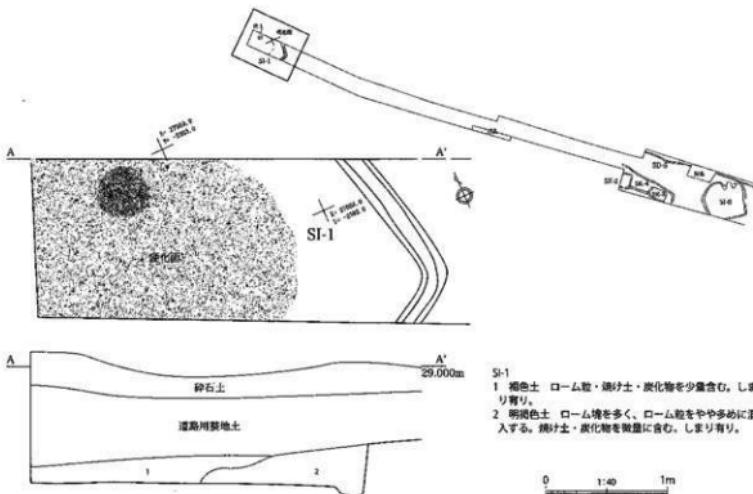
第二項 本調査区

住居跡

SI-6は、本調査区西で確認された竪穴式住居跡である。東西3.22m×南北3.14mの西壁は彎曲して膨らむが、南・東壁は方形直線状である。竈を北に設ける。確認面より約0.28mの壁が造る。埋没は自然堆積であるが、1層は埋没過程で掘り起こされ



第3図 第2次調査区全体図



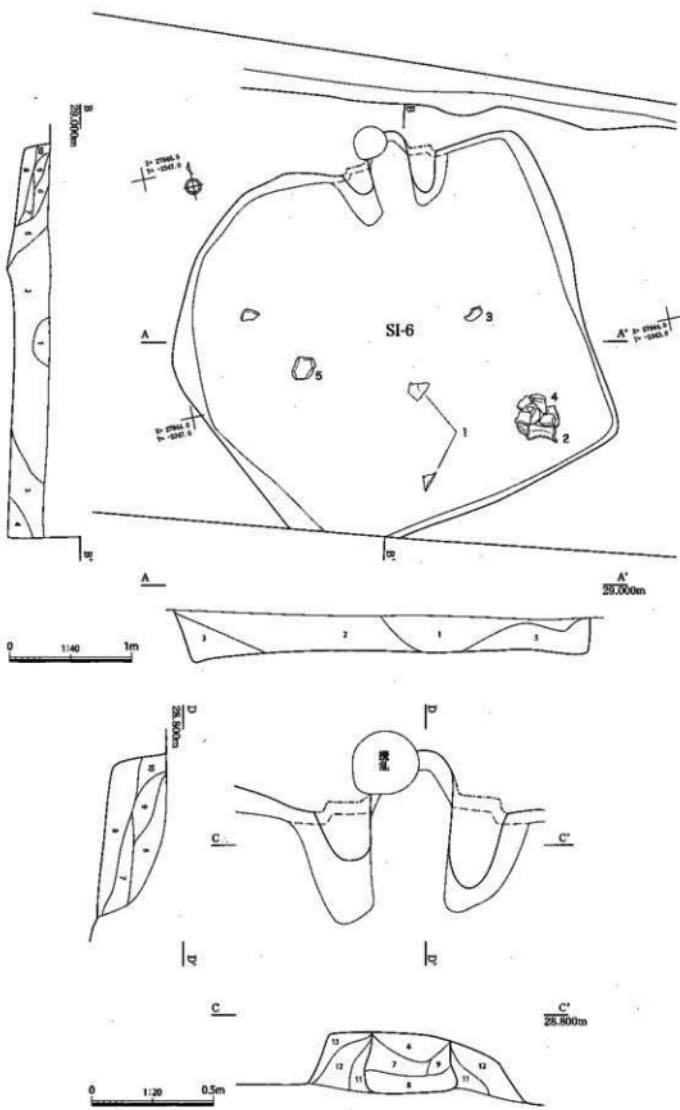
第4図 第2次調査区 SI-1 実測図

た後に堆積したような亂れにも見える。竈は火床・袖壁は違うが、煙道天井・掛け口橋部は崩落している。堆積層の調査所見では掛け口橋部の崩落土と解釈されている。しかし、掛け口橋部を破壊した折の痕跡を見ることも出来る。袖の芯は山砂に粘性を持たせ、その上にロームと山砂の混合土を塗り構築している。遺物は、床面から6片出土している。第5図2・4はやや浮いており、南側から流入した可能性もある。出土した北西の破片は土師器壺の体部である。遺物の観察所見は次の通りである。

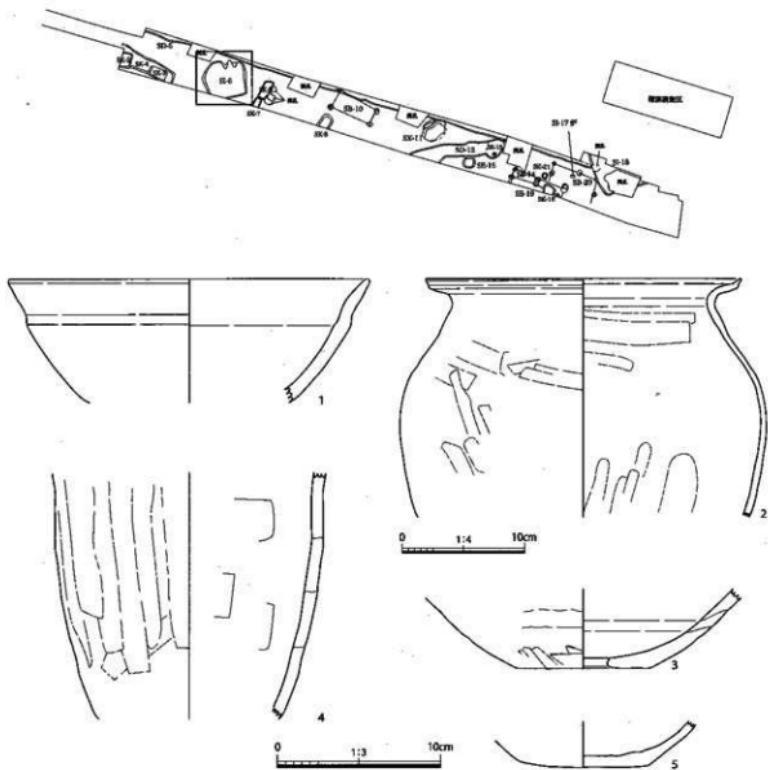
第6図1は、土師器鉢である。口径222mm、残存器高76mmで、残存率は体部中位付近から上の約1/3である。内面は横にナデしており、器面には水分の多い状態での粘土伸びが認められる。外面口辺は、強く絞り内面の口辺傾斜角より堅立つ口辺部を作る。その後、体部のケズリを斜め方向に、次いで中位に横ケズリを施す。生乾き段階で縦方向に意図しない手などの接触があり、一部器面が割られている。淡褐色を呈し、胎土に微砂粒を少量混入する。離れた二片が接合したもので、床面直上から出土した。

第6図2は、土師器壺である。口径194mm、残存器高148mmで、残存率は約1/5である。内面は上部が横ナデ、下部が底部から引き上げるように縱へナデしている。器面には水分の多い状態での粘土伸びが認められる。口辺は外反するように外へ抓み上げ、外面口辺は、比較的丁寧にナデ仕上げしている。体部中位上半には、横方向のヘラナデ、下半は斜め気味の縦方向へヘラナデが軽く行われている。淡赤褐色から淡茶色を呈し、外面体部中位から口辺にかけて、煤が付着する。胎土に微砂粒・金粉母を少量混入する。床面直上から出土した。

第6図3は、土師器瓶である。底径82mm、残存器高50mmで、残存率は底部付近約1/2である。内面はヘラによる横ナデの上にナデ仕上げが施される。比較的器面は平滑である。外面は、輪積み痕跡を残し、底部に近い部分に横方向のヘラケズリ、底部粗く、井桁状にヘラケズリを施す。底部の穿孔部分は、ヘラでケズリ、上下となる端部にも面取りを行う。淡褐色を呈し、胎土に微砂粒・金粉母を少量混入する。床面直



第5図 第2次調査区 SI-6 実測図1

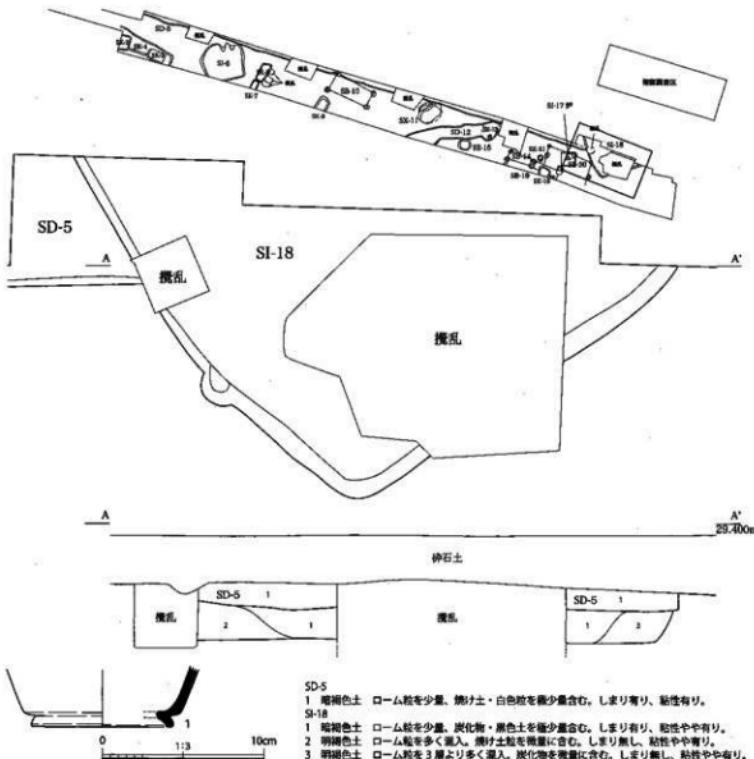


- SI-6
 1 淡褐色土 僄 3mm 以下のローム粒を均一に混入。微量の炭化物を含む。しまりやや有り、粘性有り。
 2 淡褐色土 僄 2mm 以下のローム粒を均一に少量混入。しまり有り、粘性無し。
 3 淡褐色土 僄 3mm 以下のローム粒を均一に極少混入。僄 2mm 以下の炭化物を微量含む。しまりやや有り、粘性有り。
 4 明褐色土 ローム粒を均一に少量混入。僄 2mm 以下の炭化物を微量含む。しまり、粘性有り。
 5 暗褐色土 僄 2mm 以下のローム粒を均一に少量混入。角け土粒・炭化物を微量含む。しまり、粘性有り。
 6 灰褐色土 山砂はやや多く、角け土粒はない。炭化物を微量含む。しまり有り、粘性無し。(泥入土)
 7 明褐色土 山砂は多く、角け土粒はやや多い。炭化物を微量含む。しまりやや有り、粘性無し。(ブリッジ崩落土)
 8 暗褐色土 山砂はやや多く、角け土粒は多い。角け土粒を微量含む。しまりやや有り、粘性無し。(火床)
 9 乳白色砂質土 山砂が主体で、角け土粒は少ないう。炭化物を微量含む。しまり有り、粘性有り。(第四天井崩落土)
 10 明褐色土 ローム粒はやや多く、山砂・角け土粒は少ない。しまり無く、粘性やや有り。(泥入土)
 11 暗褐色砂質土 角け土粒が主体。炭化物を微量含む。しまり有り、粘性無し。(地内土)
 12 明褐色砂質土 山砂が主体で、角け土粒は多い。しまり有り、粘性やや有り。(地)
 13 明褐色土 ローム粒が多く、山砂はやや多い。しまり有り、粘性無し。(地)

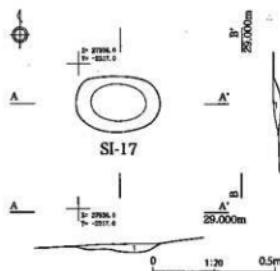
第6図 第2次調査区 SI-6 実測図2

上から出土した。

第6図4は、土器長胴壺である。残存器高152mmで、残存率は胴部の一部約1/4である。破損は輪積み単位に割れている。内面は横方向のヘラナデ、外面は縦方向のヘラナデである。淡赤褐色から淡茶色を呈し、



第7図 第2次調査区 SI-18 実測図



第8図 第2次調査区 SI-17 実測図

内面底部付近に使用痕跡とみられる斑状の剥離が顕著にみられる。胎度に砂粒を微量混入する。第5図2とともに床面直上から出土した。

第6図5は、土器壺である。底部のみが遺存する。内面に使用痕跡とみられる斑状の剥離が顕著にみられ、僅かに横方向への指のナデ痕跡が残る。外面も二次焼成による器面の荒れが顕著で、横方向のヘラナデであったことが分かる程度である。赤褐色を呈し、胎土に赤色粒子、砂粒を多く混入す

る。床面直上から出土した。

SI-18は、本調査区東で確認された竪穴式住居跡である。大きく攢乱が入り南壁を壊している。0.42～0.48mの深さで壁が遺る。床面は平坦で柱穴は認められていない。炉・竈は調査範囲内には設けられていない。埋没は自然堆積で、上部を道路側溝のSD-5が切っている。出土遺物は一点のみで、観察所見は次の通りである。

第7図1は、須恵器高台付环である。底部付近約1/4が遺存する。内彫しつつハ字状に開く底面が平坦に整えられ、高台を接合痕跡が残らない仕上げで貼り付けている。底部の腰に明確な段を作りほぼ直線的に立ち上げている。塊底部の切り離し手法は不明であるが、底部は体部と比し器厚が薄い。内面淡黄灰色、外面暗青灰色を呈し、胎土に砂粒を混入する。胎土は暗赤褐色である。茨城県岩瀬郡ノ内産か。8世紀後半の所産と見られる。埋土中から出土した。

SI-17は、本調査区東で確認された竪穴式住居跡である。炉のみが遺存する。炉は東西0.7m×南北0.48mの梢円形で、深さ0.07mである。直接遺構内から遺物の出土は無いが、周辺からは黒浜式繩文土器(第19図)や小片で図示出来ない土師器壺片、近世陶器片が出土している。発掘調査現場での所見は繩文時代の所産と見ている。

掘立柱建物跡

SB-10は、本調査区中部で確認された掘立柱建物跡である。北西隅柱穴がSD-5に切られている。桁行3.38m×梁間1.38mの方形である。柱穴には柱痕跡と見られる土層があり太さ約0.2mの柱であったと推測される。柱穴は深く、確認面より0.55m穿たれており底面は平らである。セクションラインAの柱穴は何れも、セクションラインBより浅く、支柱穴の可能性も有り、建物のプランは北側の調査区外に延びる可能性がある。西柱穴より土師器壺の小片が出土する。出土層位は不明である。

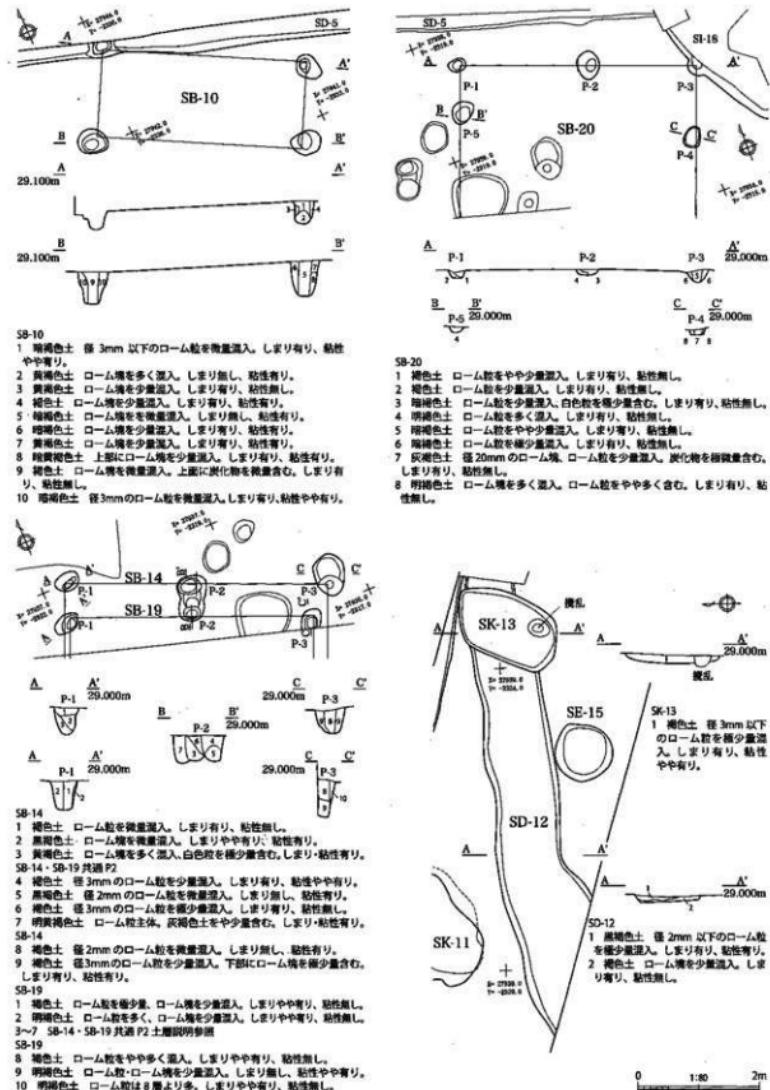
SB-20は、本調査区東部で確認された掘立柱建物跡である。SI-18の西壁を北東隅柱が切っている。確認できたのは北柱列であるが、桁行に間尺が短い柱穴があり、支柱穴になるか主柱穴になるかは不明である。北辺の柱間は西から2.2m、1.3m、東北隅柱から桁行筋に1.2m、西北隅柱から桁行に0.8mである。確認面からの深さは浅く0.2mで、一部の柱に柱痕跡と見られる土層があり、太さ約0.18mの柱であったと推測される。遺物は出土していない。

SB-14は、本調査区東部で確認された掘立柱建物跡である。北列中央柱の土層観察から、SB-19の柱穴の北に柱穴が掘られ、次にSB-14の柱穴が設けられている。建物は南に延びるため、規模は不明であるが、北辺の柱間は西から2.25m、2.23mである。一部の柱に柱痕跡と見られる土層があり太さ約0.18mの柱であったと推測される。遺物は出土していない。

SB-19は、本調査区東部で確認された掘立柱建物跡である。SB-14の南に方角を描えており、新旧関係はSB-19→SB-14である。規模はSB-19が若干小さいが、同一地点に建て替えられた建物跡の可能性がある。北辺の柱間は西から2.2m、2.2mの等間である。一部の柱に柱痕跡と見られる土層があり太さ約0.18m、0.16mの柱であったと推測される。遺物は西隅柱からカワラケの小片が出土する。出土層位は不明である。

溝跡

SD-5は、本調査区北壁と平行して確認されている溝である。現道路の側溝と見られる。上部に砂利層、下部は自然堆積の埋没である。遺物は第12図2の瀬戸天目茶碗が出土する。底部が欠けた体部約1/6が遺存する。器形は穂やかで口辺が垂直気味に立ち上がる天目形で、口縁部を若干くびらせ、わずかに外反りし



第9図 第2次調査区 SB・SD実測図

ている。口辺下端と脚部境には太い埴輪目がめぐり、腰から高台にかけて緩く湾曲する。高台回りは切り笠を立てている。成形時には、腰回りに籠を入れ、高台接合部には指ナデを浅く入れ底部端を作る。鉄質黒釉は厚く鉛釉で、外面の半分強まで漬け掛けされ、釉薬下端には釉溜まり状に厚みを増す。黒釉には黄褐色のかせが万遍なく現れていて、古色蒼然の趣を持つ。胎土に粗い砂粒を混入する。SK-5 東セクションベルト内からの一括出土である。表面採集遺物品として扱うことも可能であるが、SD を SK としていた時点での出土で、出土位置は特定できる。本調査区とトレンチ調査区の境となる角の北壁付近である。

SD-12は、本調査区中央から東付近に確認された溝である。幅1.1～1.2mで、確認面から深さ0.1mが違う。掘方は直線的で無く、調査区内ではSK-13に切られ、SD-12→SK-13の新旧関係がある。東西方向に掘られているが、底面が平坦で根切り等の溝では無い。西で南方向に曲がるような膨らみを見せている。遺物は出土していない。

井戸跡

SE-15は、SD-12に接して穿たれた井戸跡である。調査の都合上、確認面より0.7mを調査し、そこからピンボールは1m以上入ることから井戸と判断した。直径約0.9mの不整円形である。遺物は出土していない。なお、第1次調査で確認された井戸は、標高24mから25mを底にするよう掘られており、水脈は標高25m付近にあったものと思われる。

土坑

SK-9は、本調査区南で確認された土坑である。東西0.95mで、南北は1.15mを確認し調査区外へ延びる長方形である。確認面より約0.22mで平らな底面に達する。埋没は底部に薄く堆積した後、側面が埋まる自然堆積である。遺物は出土していない。

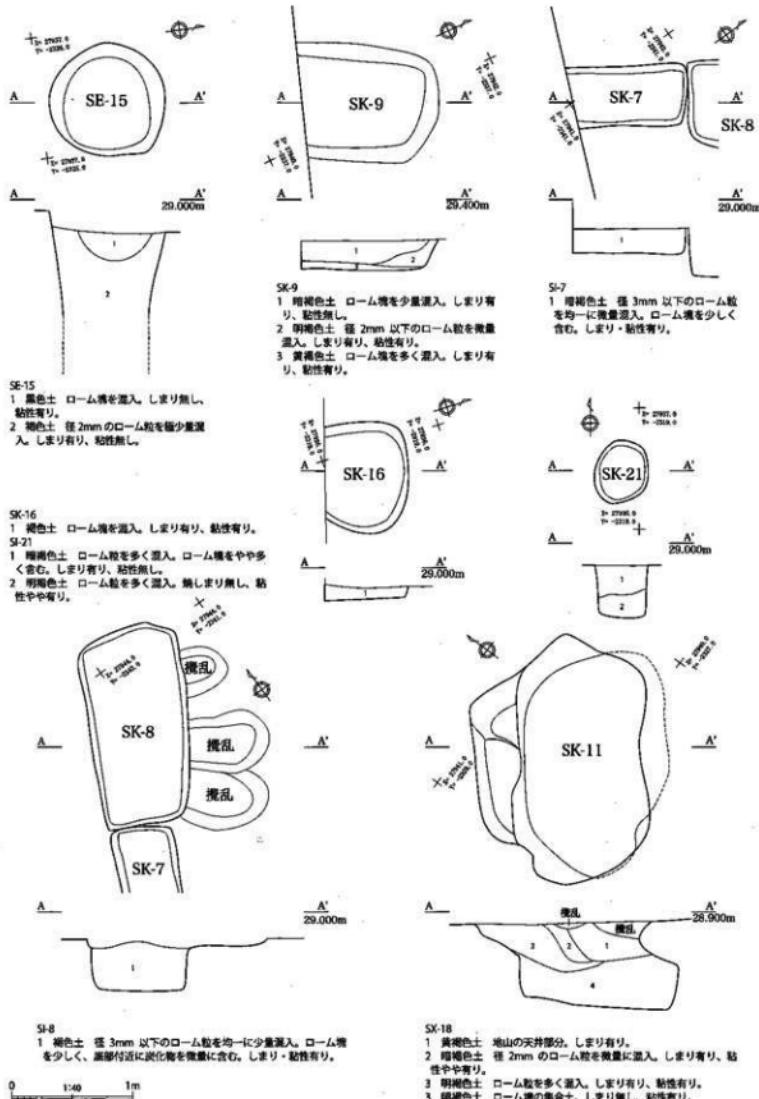
SK-7は、本調査区中央西で確認された土坑である。SK-8と北壁で接する。東西0.5m、南北は1mを確認し調査区外へ延びる長方形である。確認面より約0.2mで平らな底面に達する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-16は、本調査区東部で確認された土坑である。SB-19と近接する。東西0.92m、南北は0.65mを確認し調査区外へ延びる不整円形である。確認面より約0.1mで平らな底面に達する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

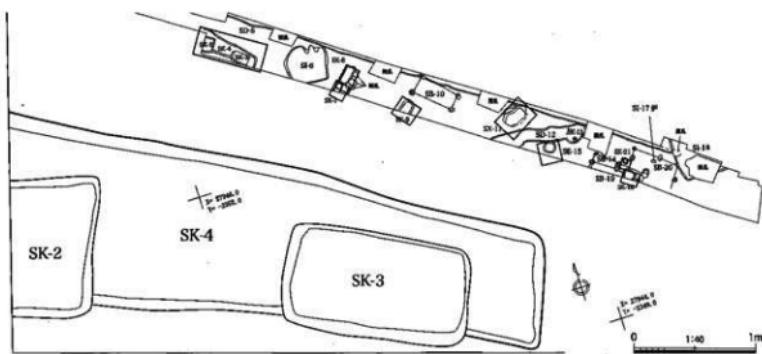
SK-21は、本調査区東部で確認された土坑である。SB-14と近接する。東西0.44m、南北は0.5mの椭円形である。確認面より約0.4mで平らな底面に達する。埋没は下半と上半に二分され、レンズ状堆積ではないことから人為的な埋め戻しも考えられる。遺物は出土していない。

SK-8は、本調査区中央西で確認された土坑である。SK-7と南壁で接する。東西0.82m、南北は1.65mの長方形である。東は三箇所攢乱を受けている。確認面より約0.4mで平らな底面に達する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は埋土一括として第12図3の柵鉢片が出土した。柵鉢は底部付近約1/8が遺存する。内面は七条柵目のヘラで、直線上に掻き上げ、柵目をつける。柵目の右端一条は深く太い特徴を持つ。器面に摩耗が認められ、使用痕跡とみられる。外面はヘラでナデ漬され光沢が生じている。一部に煤が付着する。内面淡灰色、外面黒色、胎土に砂粒を含む。

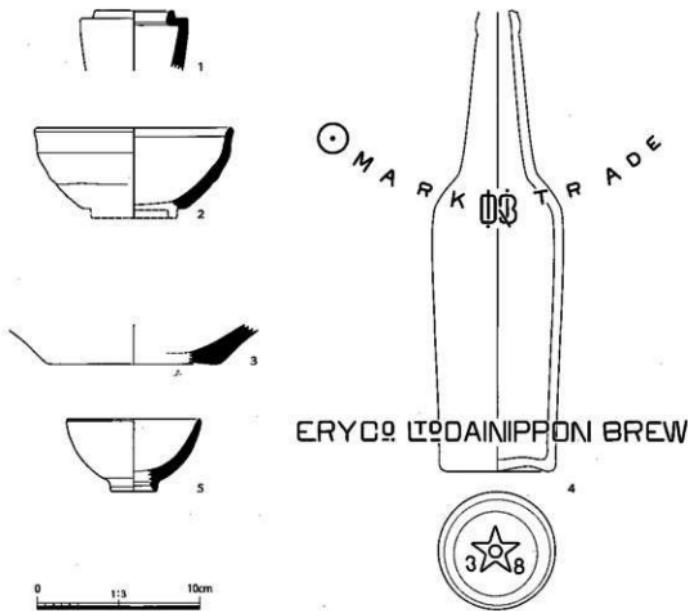
SK-11は、本調査区中央東部で確認された地下式坑である。SD-12の北に位置し近接する。底面の平面形は不整椭円形で、底面短辺となる東西幅は1.2m、長辺南北幅1.82mである。壁は地山のローム土を掘り込



第10図 第2次調査区 SE・SK実測図



第11図 第2次調査区 SK実測図



第12図 第2次調査区 SK・表面探集遺物実測図

んだもので、底部より約0.4m垂直に立ち上がる。断面図に見られる西からの流入及び東側の天井基部の遺存から、天井は掘り残した地山ローム土であったことが分かる。そのまま天井部位置を推定すると、中央部でも高さ0.5m程度の地下室構造であったと見られる。天井の厚さはローム土分だけで約0.3m、その上層の黒ボク土等表土を含めると0.7mはあったものと思われる。遺物は上層の埋土一括として内耳土器の小片が出土する。固化できる大きさでは無い。黒色を呈し、焼成は甘い。

SK-2～4は、本調査区西端、トレーナー調査区と接続する付近で確認された土坑である。SK-2はSK-4より新しく、SK-3はSK-4より新しい。SK-2からは鉄環が出土しているが取り上げてはいない。SK-3からは、磁器・麦酒瓶が出土している。何れも現代に属するものである。平面図は作成されたが、現代遺物が出土したため、断面図等は記録されていない。遺物の観察所見は次の通りである。

第12図4は、硝子製麦酒瓶である。首部上端から口部が欠損する。現存高さ282mm、最大幅80mm、肩部の傾斜変換点付近に「DNB」の商標の右に「TRADE」、左に「MARK」、「DNB」商標の裏に当たる部分に「○」、下部に「DAINIPPON BREWERY CO.LTD.」、瓶底には☆印の左右下に3と8の陽刻がある。多硫化鉄系の琥珀的な透明感を持つ茶色である。大日本麦酒は、明治39(1906)年3月の設立で、昭和24(1949)年に日本麦酒と朝日麦酒に二分化されている。昭和18(1943)年にビール銘柄商標が廃止され、以降ラベルは「麦酒」に統一、同時に麦酒瓶の共用化、容量の統一化が実施されているため、それ以前の生産と考えられる。底部の☆印と左右の3と8が製造年月を表しているのであれば、大正三年八月若しくは昭和三年八月の製造となる。SK-3埋土一括として出土する。

第12図5は、小型湯飲み茶碗である。約1/3が遺存する。白胎磁にコバルトで大きな円斑を四箇所配し、その上から青磁釉を掛けてボカシとしている。コバルトは白胎磁にやや浸透している。高台に接続する体部下端には、二条線が糖輪絵付けされている。急須と湯飲み茶碗五個が一組の単位で販売されていた量産品に属するものであろう。

その他

表面採集遺物として、第12図1の須恵器短頸壺がある。薬壺形ともいえるが、用途限定は出来ないので短頸壺としておく。口辺から肩部底部付近約1/6が遺存する。糖輪回転時に筒状から内に折り曲げ、親指を内に、人差し指を外にして口辺を抓み出している。その際、親指の腹で口辺内側の器面を整えている。また、抓み出しで寝かせた人差し指の爪先で口辺と肩部の境を作り、爪の腹で肩部の平坦面を作り上げている。内・外面とも淡青灰色を呈し、胎土に砂粒・白色針状物質を少量混入する。笠間方面の土より精製されているようにも見える。埼玉県南比企産か。

第三項 確認調査区

確認調査区は、現道路部分の調査である。本調査区北壁沿いにSD-5があり、道路建設による影響は容易に想定できたが、過去の工事に関する記録により、センターラインより南の西行き車線は、旧側溝、0.5m空けて電話用地中管、下水マンホールが列んで設置されており、それらの埋設深度を考慮すると現存遺構は無いものと判断された。これを受けて北側の東行き車道部分を10×3.5mの範囲で調査した。その結果、こちらも道路建設に伴う掘削により、本調査区で遺構が存在する標高以下まで土が動かされており、遺構の存在は認められなかった。

第四節 第3次調査区

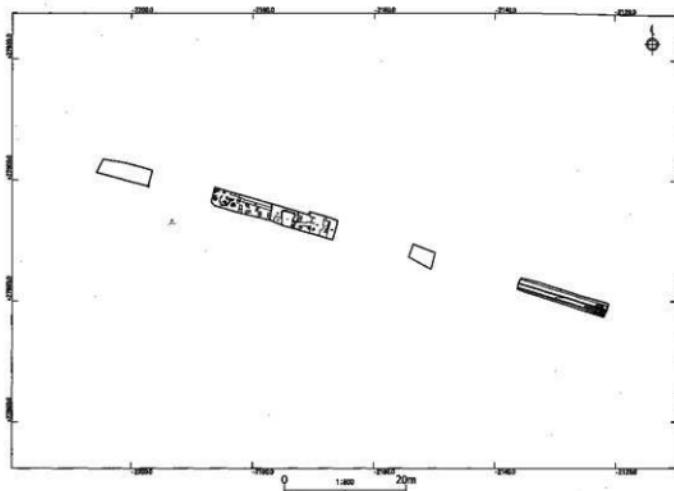
第一項 1区

1区は、東野田交差点に接する調査対象区で、もっとも西に位置する。第1次調査区と接する場所となる。重機により表土を除去した結果、水道関係管理設に伴う擾乱溝や花生生産用部分深耕痕跡が数条認められる以外、遺構は存在しなかった。2区に近接する修理工場経営者及び近隣住民によれば、過去、40年ほどは牛花生の記憶が無く、それ以前は不明のことであった。表土より約0.6mでローム層上面に達する。ローム層上層は黒ボク土である。現在使用している駐車場整備による碎石が上面に敷かれていた。

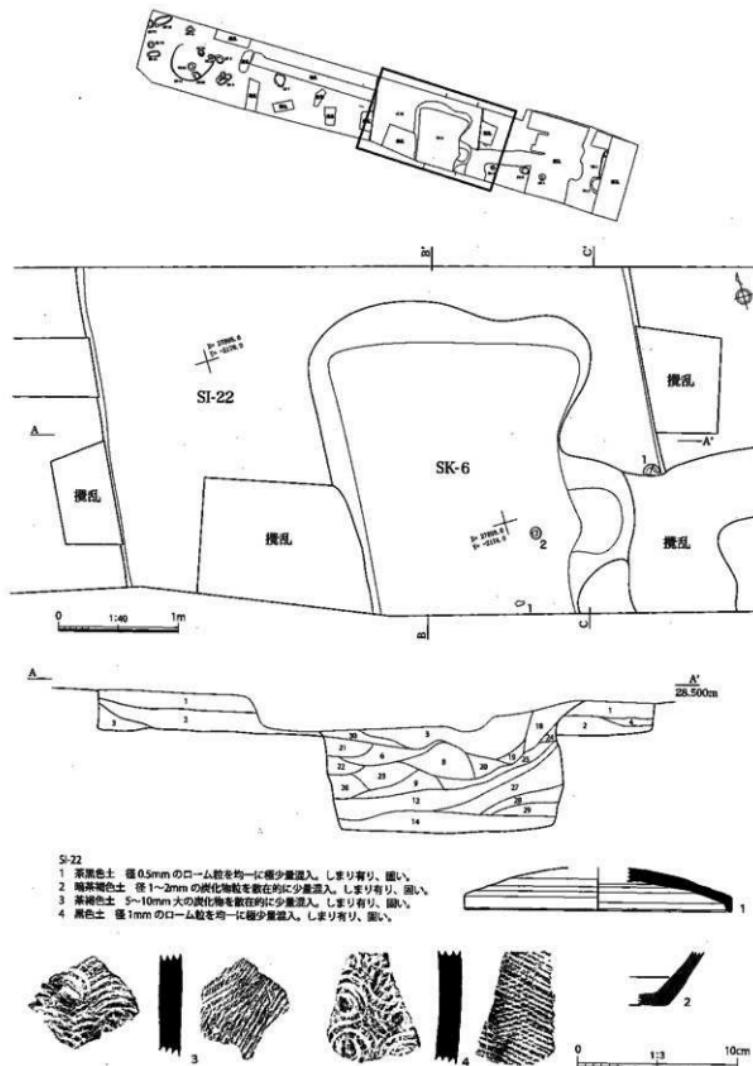
第二項 2区

住居跡

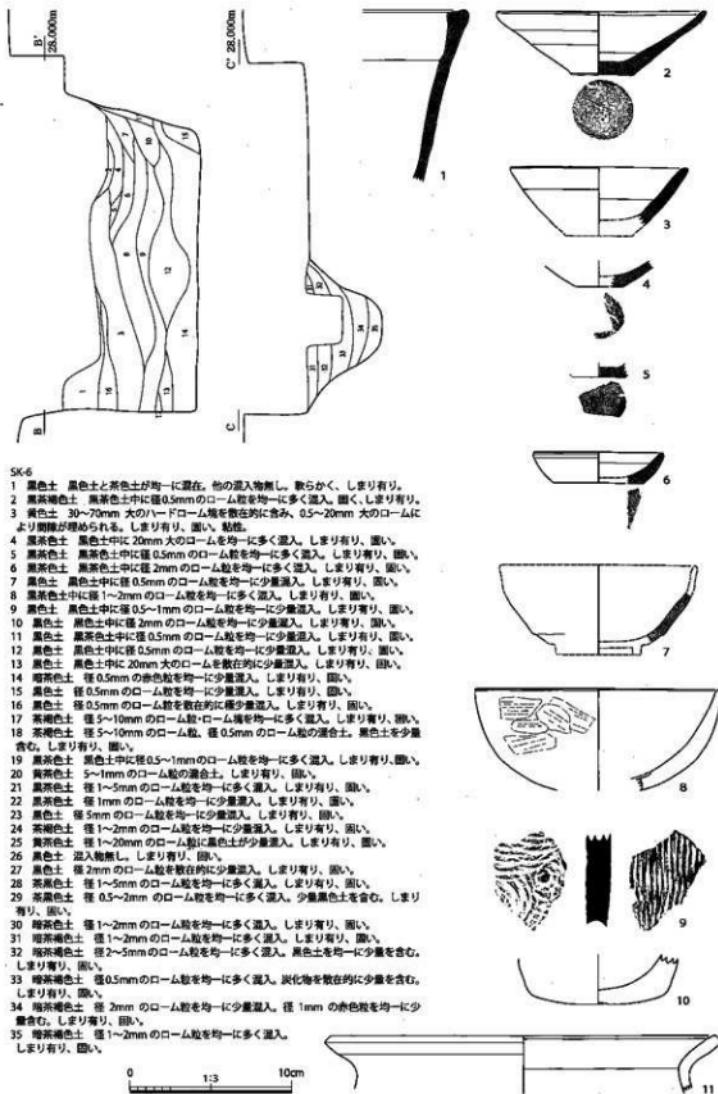
SI-22は、調査区中央東寄りで確認された竪穴式住居跡である。東西は4.64m、南北は2.7mを確認したが調査区外に延びる。壁はほぼ垂直で確認面から0.32mの高さが遺存する。底面は平坦で特段硬化面は認められなかった。住居跡の中心部から東にSK-6が構築され、また、現代の建物建設及び撤去に伴う重機により擾乱を受け、住居自身は遺存状況が良くない。東壁に接して遺物が遺るが、この遺物も現代の擾乱溝により半分が削り取られている。埋没は自然堆積である。遺物の出土は少なく、SK-6掘削時及びその埋没過程で流入したものもあると見られる。遺物の観察所見は次の通りである。



第13図 第3次調査区全体図



第14図 第3次調査区 SI-22・SK-6 実測図1



第 15 図 第 3 次調査区 SI-22・SK-6 実測図 2

第14図1は、須恵器蓋である。摘み周辺は欠損するが約2/3が遺存する。天井部となる製作時の内側に顯著な水引き痕跡による稜が認められる。反りとなる端部は、少しく外反するように折み上げ。端部は丸く収める。甲部となる部分にはヘラケズリによる回転痕跡があり、砂粒の移動は蓋の正位に据えた状態で反時計回りである。甲部には端部から中央へ斜めに沈線が走るが、窓印というよりは二次的な所産であろう。甲部は青灰色から暗赤褐色、天井部は淡赤褐色で、割れ口断面も暗赤褐色である。全体的に還元がなされていない。胎土に砂粒・粗砂粒を混入し、益子産の土と思われる。つまみは、甲部の器面が少しく凹むため、半乾燥後、回転させながら甲の中央を彫り込み接合したものと見られる。比較的大きく、低平な宝珠状で、8世紀前半の所産と考えられる。SI-22 東壁際の床面上から出土した。

第14図2は、内耳土器の底部付近の一部である。内面は粗いナデ、外面はナデの後、ヘラケズリで仕上げる。焼成は良好、内面淡黒色、外面黒茶褐色、胎土に砂粒・黒雲母片を多く混入する。SI-22 の上層から出土。

第14図3・4は、須恵器大型の体部片である。何れも厚さ13~14mmで、同一個体と見られる。外面は平行沈線の印を行い、一部は刷り消されている。内面には青海波があり、押さえ具で密に押された痕跡が残る。焼成は甘く、淡茶色を呈し、胎土に微砂粒を少量混入。SI-22 の上層から出土。堆積土分離の精度でSK-6の時期の遺物が上層に混入した可能性もある。

土坑

SK-6は、調査区中央東寄りで確認された地下式坑である。底面の東西は1.7m、北壁付近では2.08mである。南北は2.2mを確認したが南辺は調査区外に延びる。壁はほぼ垂直で一部は外に彎曲する掘方である。底面から1.1mの高さが遺存する。底面は平坦で、SI-22 を切って構築されている。東側に入口と見られる傾斜坑が認められる。堆積するローム塊を中心とする3層を通常は天井崩落土と考えるが、SI-22 の床面より高いため、地山のローム土とは認められず、整合性がとれない。本来、地山を掘り込んで地下室構造とした場合、SI-22 の堆積土が天井となることからローム土の厚い流入は有り得ない。このことから、ローム土の天井を人工的に構築していた可能性も考えられるが、実際に可能であるかは、今後の検討を要するものである。堆積は、東の出入り口からの流入土で埋没し、西の天井の破損で塊的に土が進入した後、一度に埋まったものと思われる。遺物は遺構に直接接するものではなく、何れも埋没過程で流れ込んだものである。

第15図1は、内耳土器の口辺の一部である。内面は横方向へのナデで仕上げられている。口辺には段を設け、一旦絞った後、断面三角形状に口辺部を作り、口縁はやや凹状となるよう指の腹で押さえている。外面も横方向へのナデで仕上げられているが、煤が全面に付着する。焼成は良好、色調は内面暗茶褐色、外面黒色、胎土に砂粒を含む。SK-6の天井崩落土の上に堆積した黒色土（SK-6の1層）から出土した。地下式坑底部から0.9m高い標高28.17m地点からの出土である。

第15図2は、完形のカワラケである。内・外面とも轆轤時の回転指頭痕を残す。内面は、狭い底面周辺が淡茶色から茶色で、炭化吸着した7~15mmの部分を経て淡黒色の口辺に至る。外面は厚みを減じながら口辺下端に至り一旦押された後親指に力を掛けて内側するように口辺を収める。直径38mmの底部は糸切り離し、底部端を軽くナデ面取りする。体部上半は炭化による黒色化する。焼成は良好、胎土に砂粒を含む。SK-6の天井崩落土の上に堆積した黒色土（SK-6の1層）から出土した。地下式坑底部から0.7m高い標高27.98m地点からの出土である。底部から体部下半が油溜まりによる土器自色、その上からが煤とみられる事から、灯明皿の用途が考えられる。15~16世紀の所産である。

第15図3は、カワラケの体部約1/6である。内・外面とも轆轤時の回転指頭痕を残す。直線的に引き上

げた軽く口縁を外に押さえて仕上げる。内面下部に傾斜変換点があり、およその大きさは推定できる。焼成は甘く、色調は内外面共に白茶褐色、胎土に微砂粒を少量含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

第 15 図 4 は、カワラケの底部付近約 1/3 である。内・外面とも轆轤時の回転指頭痕を残す。底部は糸切り離しで、端部は乾燥後軽くナデて丸く面取りをする。焼成は良好、色調は内外面共に淡茶色、胎土に砂粒が多く含む。SK-6 西の攪乱から出土した。

第 15 図 5 は、カワラケの底部である。内は轆轤時の回転痕を残す。底部は糸切り離しで、焼成は甘く、色調は内面が白茶色、外面が淡白褐色、胎土に微砂粒を少量含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

第 15 図 6 は、カワラケの体部約 1/8 である。内・外面とも轆轤時の回転指頭痕を残す。親指の腹で押された分だけ立ち上げ、内凹気味に抓み上げ親指・人差し指で押さえるように口辺を収めている。焼成は良好、色調は内外面共に白茶色、胎土に砂粒を少量含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

第 15 図 7 は、瀬戸天目茶碗である。体部下半が約 1/8 が遺存する。墨形は穏やかで口辺が垂直気味に立ち上がる天目形で、口辺下端の傾斜変換点が僅かに分かる程度までが遺る。鉄質黒釉は厚く、外面の底部近くまで濁け掛けされ、釉薬下端には釉溜まり状に厚みを増す。釉薬は鉛釉で禾目天目である。胎土に砂粒を混入する。SK-6 西の攪乱から出土した。

第 15 図 8 は、土師器の大型の壺である。体部の約 1/4 が遺存する。内面は横ナデを全周させ、外面は単位の細かい横方向へのラケズリで成形する。厚く内壁し、焼成は甘く、色調は内面が赤茶褐色、外面が淡黒茶色、胎土に砂粒を含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

第 15 図 9 は、須恵器大壺の体部である。第 14 図 3・4 と同一個体と見られる。厚さ 13 ~ 14mm で、外面は平行沈線の叩きを行い、一部は刷り消されている。内面には青海波があり、押さえ具で密に押さえられた痕跡が残る。焼成は甘く、淡茶色を呈し、胎土に微砂粒を少量混入。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

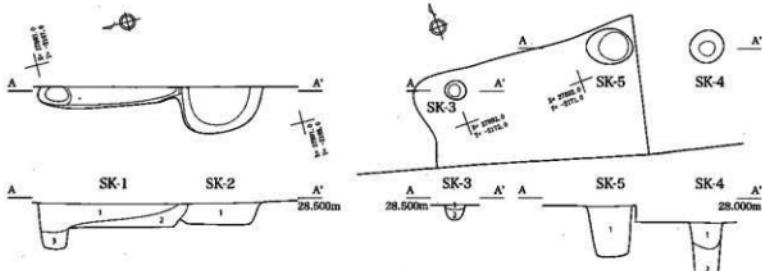
第 15 図 10 は、土師器鉢の底部である。約 1/4 が遺存する。内面は擦り消したような仕上がりであるが、使用痕跡か器面の剥離損傷が多い。外面は全体に斑状の細かい剥離損傷が顕著である。焼成は甘く、色調は内・外面ともに淡茶色、胎土に砂粒を多く含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

第 15 図 11 は、土師器壺の口辺である。約 1/12 が遺存する。内面は平滑な仕上がりであるが、外面は粗いナデ痕跡が目立つ。口辺は平らに角ばった印象で収めている。焼成は甘く、色調は内・外面ともに淡茶色、胎土に砂粒を多く含む。SK-6 北部から一括出土として取り上げられている。

SK-1 は、調査区東端部で確認された土坑である。SK-2 を切って掘られている。遺構の東半分は現代の建物建築による攪乱で失われている。南北 1.2m、東西 0.2m が遺り、梢円長方形であったと見られる。北部に 0.18m 低い穴を穿つ。それ以外の底面は平らで、南の壁はすこし傾斜するが、北の一段下がる壁は垂直である。埋没は一段低い穴から埋まり南から堆積している。遺物は出土していない。

SK-2 は、調査区東端部で確認された土坑である。SK-1 に切られ、北壁の一部を失う。遺構の東半分は現代の建物建築による攪乱で失われている。南北 0.65m、東西 0.38m が遺存し、隅丸方形であったと見られる。壁はやや斜めであり、底面は平らである。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-3 は、調査区東部で確認された土坑である。東西 0.18m × 南北 0.14m の梢円形である。壁はやや斜めで、



SK-1
1 墓場色土 径 1mm のローム粒を散在的に含む。しまりやや無し。粘性や有り。

2 墓場色土 30mm~50mm 大のローム塊を散在的に少量含む。しまりやや無し。粘性有り。

3 墓場色土 ローム主体。しまり無し、粘性有り。

SK-2

1 墓場色土 10mm~30mm 大のローム塊を散在的に少々含む。しまりやや無し。粘性有り。

SK-3
1 明褐色土 径 1mm のローム粒を均一に少々含む。しまりやや無し。粘性有り。

2 黄褐色土 径 1mm~5mm のローム粒を均一に多く含む。しまり・粘性有り。

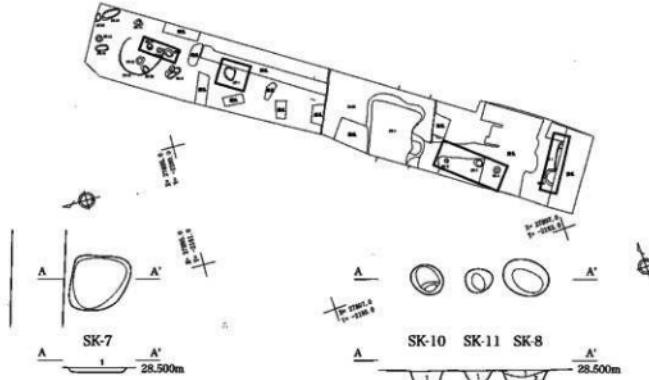
SK-4

1 墓場色土 径 1mm~2mm のローム粒を均一に多く含む。しまり・粘性有り。

2 黄褐色土 10mm 大のローム塊を均一に少々含む。しまりやや無し。粘性有り。

SK-5

1 菊褐色土 径 1mm のローム粒を均一に多く含む。しまり・粘性有り。



SK-7

1 墓場色土 5mm~30mm 大のローム塊を均一に多く含む。しまり・粘性有り。

SK-8

1 墓場色土 10mm 大のローム塊を散在的に少々混入。しまり・粘性やや有り。

2 墓場色土 10mm~30mm 大のローム塊を散在的に多く混入。しまり無し・粘性有り。

3 墓場色土 径 1mm のローム粒を均一に多く混入。しまり無し、粘性有り。

SK-10

1 墓場色土 10mm~30mm 大のローム塊を散在的に多く混入。しまり・粘性有り。

SK-11

1 墓場色土 10mm 大のローム塊を散在的に多く混入。しまり・粘性やや有り。



第 16 図 第 3 次調査区 S K 実測図 I

底面は丸い。確認面より深さ 0.14m が遺存する。埋没は自然堆積である。遺物は出土していない。

SK-4 は、調査区東部で確認された土坑である。東西 0.28m × 南北 0.3m の円形である。壁はほぼ垂直で、底面は平らである。確認面より深さ 0.6m が遺存する。埋没は自然堆積である。遺物は出土していない。

SK-5 は、調査区東部で確認された土坑である。東西 0.4m × 南北 0.28m の楕円形である。壁はほぼ垂直で、底面は平らである。確認面より深さ 0.42m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-7 は、調査区中部西で確認された土坑である。東西 0.46m × 南北 0.46m の不整形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.04m が遺存する。埋没は自然堆積である。遺物は出土していない。

SK-8 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-9 及び SK-10 と直線上にあり、SK-11 とは 0.08m 離れている。東西 0.36m × 南北 0.3m の楕円形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.26m が遺存する。埋没は自然堆積である。遺物は出土していない。掘立柱建物の柱筋とはならないため、有機的関係や時間差は不明である。

SK-9 は、調査区西部で確認された土坑である。東西 0.62m × 南北 0.5m の不整形である。四つの穴が同位置に穿たれたもので、掘立柱建物の柱穴にはならない上、それぞれの新旧が明確では無いものもあるため、遺構発番はひとつとした。浅く底面が平らな方形土坑を円形土坑が切っている。方形土坑は、確認面より深さ 0.08m、円形土坑は確認面より深さ 0.2m である。何れも埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-10 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-8 及び SK-10 と直線上にあり、SK-11 とは 0.18m 離れている。東西 0.25m × 南北 0.5m の楕円形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.1m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。掘立柱建物の柱筋とはならないため、有機的関係や時間差は不明である。

SK-11 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-8 及び SK-10 と直線上にあり、SK-8 とは 0.08m、SK-10 とは 0.18m 離れている。東西 0.22m × 南北 0.2m の楕円形である。底面は丸く、確認面より深さ 0.26m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。掘立柱建物の柱筋とはならないため、有機的関係や時間差は不明である。

SK-12 は、調査区西端部で確認された土坑である。東西 0.28m × 南北 0.28m の楕円形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.22m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

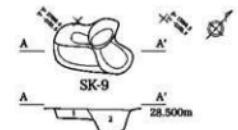
SK-13 は、調査区西端部で確認された土坑である。東西 0.54m × 南北 0.22m の隅丸方形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.08m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-14 は、調査区西部で確認された土坑である。東西 0.38m × 南北 0.28m の隅丸三角形である。底面は丸く、確認面より深さ 0.4m が遺存する。埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

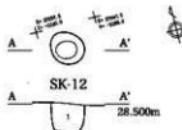
SK-15 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-25 に切られている。東西 0.34m × 南北 0.32m の楕円形である。底面は平らで、SK-25 底面より深さ 0.14m が遺存する。遺物は出土していない。

SK-16 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-25 に切られている。東西 0.78m × 南北 0.34m の楕円形である。底面は平らで、埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-24 は、調査区西北端部で確認された土坑である。SK-16 と隣接する。西辺は調査区西壁外に延びており、



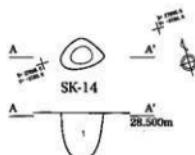
SK-9
1 緑褐色土 径 1mm のローム粒を散在的に少量混入。
しまり・粘性有り。
2 地質複合土 緑褐色土 径 1mm~3mm のローム粒を
均一に多く混入。しまり・粘性有り。



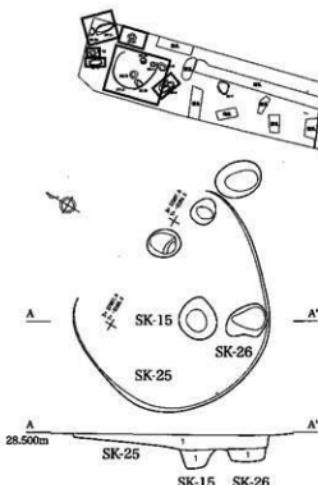
SK-12
1 明褐色土 径 1mm のローム粒を散在的に少量混入。
しまり・粘性有り。



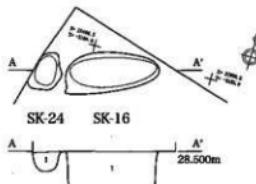
SK-13
1 緑褐色土 径 1mm のローム粒を散在的に少量混入。
しまり・粘性有り。



SK-14
1 緑褐色土 径 5mm のローム粒を散在的に極少量混入。
しまり・粘性有り。



SK-15
1 緑褐色土 径 1mm のローム粒を散在的に少量混入。
しまり・粘性有り。
SK-25
1 黄褐色土 径 5mm~8mm のローム粒を均一に多く混入。
しまり無し・粘性有り。
SK-26
1 緑褐色土 径 1mm のローム粒を均一に多く混入。
しまり・粘性有り。



SK-16
1 緑褐色土 径 1~5mm のローム粒を均一に少量混入。
しまり・粘性有り。
SK-24
1 黒褐色土 径 5mm~10mm のローム粒を均一に多く
混入。しまり無し・粘性有り。

0 1:40 1m

第 17 図 第 3 次調査区 S K 実測図 2

確認した長さが東西 0.22m、南北は 0.35m の梢円形である。底面は平らで、埋没は層の分離が出来なく短期間に堆積している。遺物は出土していない。

SK-25 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-15・26 の上から掘られている。確認面の高さ設定の時点で、北辺は失われている浅い土坑である。東西 1.75m × 南北 1.5m の梢円形である。底面は平らで、確認面より深さ 0.02 ~ 0.1m が遺存する。遺物は出土していない。

SK-26 は、調査区西部で確認された土坑である。SK-25 に切られている。東西 0.35m × 南北 0.28m の不整形である。底面は平らで、SK-25 底面より深さ 0.1m が遺存する。遺物は出土していない。

第三項 3 区

3 区は、2 区と 4 区の中間に有り、2 区とは民間自動車修理工場出入り口の調査除外部分約 13m を、東に経た修理工場事務所の前である。調査は東西 4.3m、南北 2.3m を重機によって表土除去作業を行った。確認面はローム層上面である。その結果、小型重機による掘削痕跡が認められる以外、遺構は存在しなかった。なお、3 区と 4 区の間も、同様の調査除外部分となっており、その距離は 14.7m である。

第四項 4 区

溝跡

SD-21 は、調査区東端で確認された台地縁辺に沿って南北走行する溝である。確認面上の上場幅 0.62m、確認した南北長 2m、確認面からの深さ 0.42m である。底面は平らで断面方形をなす。埋没は西の高い斜面から 6 層が一旦埋まる。しかし、3・4 層との境が平坦であるため、ここで一度掘り返されているものと見られる。次の堆積 4 層は東から土が流入している。東は斜面の下る方であり、通常、低い方からの流入は考えにくい。そのため、掘り上げた土は東の斜面を下る方へ置いたものと解釈できる。その後は、東側からの流入が中心である。なお、何れの層もローム粒が混入しており、仮に土壌状のものがあったとしても一度に崩落したものではない。また、流路の特徴的な下部の細かい堆積層や砂層もなく、水が流れていた痕跡は認められない。遺物は出土していない。

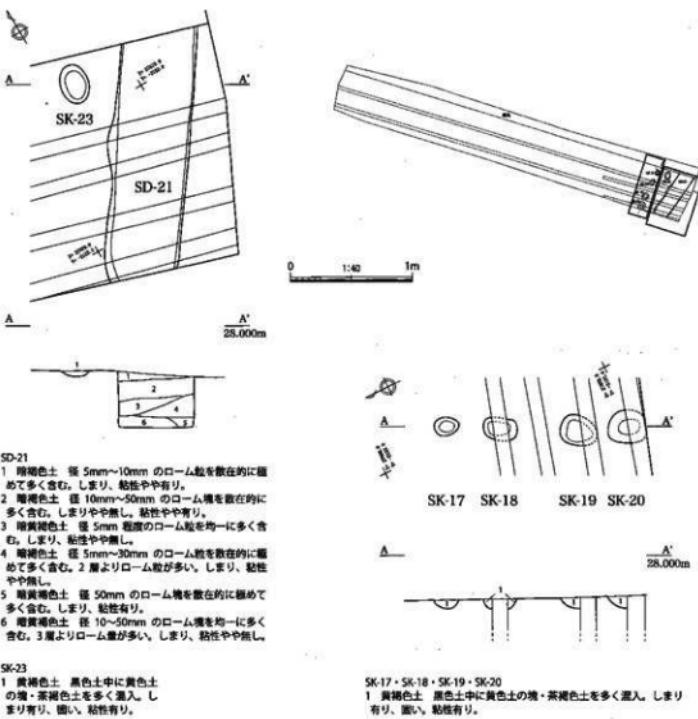
土坑

SK-17 は、調査区東部で確認された土坑である。SD-21 に沿って平行に穿たれた土坑のひとつである。東西 0.15m、南北 0.2m の梢円形で、確認面からの深さは 0.08m、底面は丸い。遺物は出土していない。

SK-18 は、調査区東部で確認された土坑である。SD-21 に沿って平行に穿たれた土坑のひとつである。ほぼ中央を牛蒡生産用部分深耕機による攪乱を受けている。東西 0.2m、南北 0.38m の梢円形で、確認面からの深さは 0.08m、底面は丸い。遺物は出土していない。

SK-19 は、調査区東部で確認された土坑である。SD-21 に沿って平行に穿たれた土坑のひとつである。南半分を牛蒡生産用部分深耕機による攪乱を受けている。東西 0.25m、南北 遺存長 0.18m、推定南北長 0.3m の梢円形で、確認面からの深さは 0.08m、底面は丸い。遺物は出土していない。

SK-20 は、調査区東部で確認された土坑である。SD-21 に沿って平行に穿たれた土坑のひとつである。南半分を牛蒡生産用部分深耕機による攪乱を受けている。東西 0.28m、南北 遺存長 0.18m、推定南北長 0.32m



第18図 第3次調査区 4区実測図

の梢円形で、確認面からの深さは 0.1m、底面は丸い。遺物は出土していない。

SK-23 は、調査区東部で確認された土坑である。SD-21 に近接する土坑である。東西 0.22m、南北長 0.32m の梢円形で、確認面からの深さは 0.04m、底面は丸い。遺物は出土していない。

SK-17・18 のそれぞれの土坑心々は 0.4m である。SK-19・20 の心々も同様である。SK-17 と SK-19 の心々は 1.1m、SK-18 と SK-20 の心々も同じである。当該地区は造成により上部が削平、盛り土され平坦となっている。表土面や旧表土面は失われているが、元来、表土が有ったと思われる高さから確認面までの深さは推定 0.6m である。従って、地中に約 0.7 ~ 0.8m 杭を打ち込んだ先端部分の痕跡が遺存していると見るとが出来る。

2 区西部と 4 区 SD-21 付近の遺構確認面の高さは、前者が標高 28.51m、後者が標高 27.64m で、比高 0.87m ある。それぞれの最高点から約 65m 離れており、その間の傾斜角度は凡そ 0.77 度である。この集落境界区画とみられる位置は、東斜面となる緩斜面が、この溝付近で傾斜変換し、やや傾斜角度が急になって水田面に落ち込むため、視覚的・体感的に台地の縁辺と認識できる地点である。

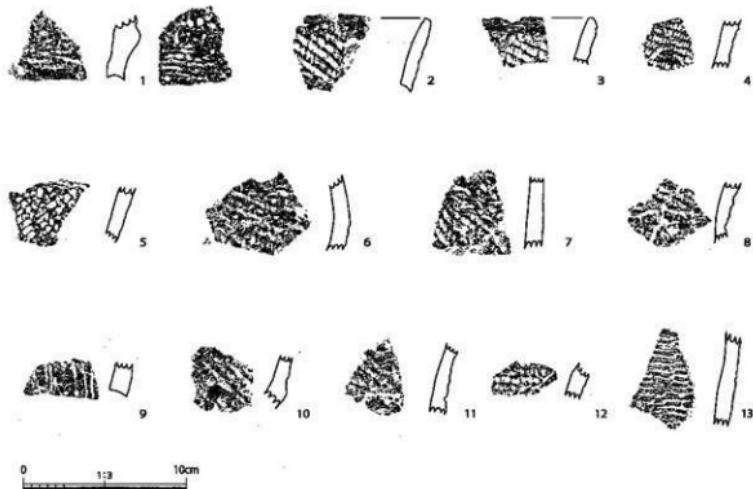
第五節 繩文時代の遺物

今回の調査で出土した縄文土器は17点で、そのうち13点を示す(第19図)。すべて遺構外から出土したものである。

1は、早期後半条痕文系土器である。表裏条痕で、纖維をやや多く含む。隆帶を貼付し、その脇に刺突を加えている。色調はにぶい褐色を呈している。

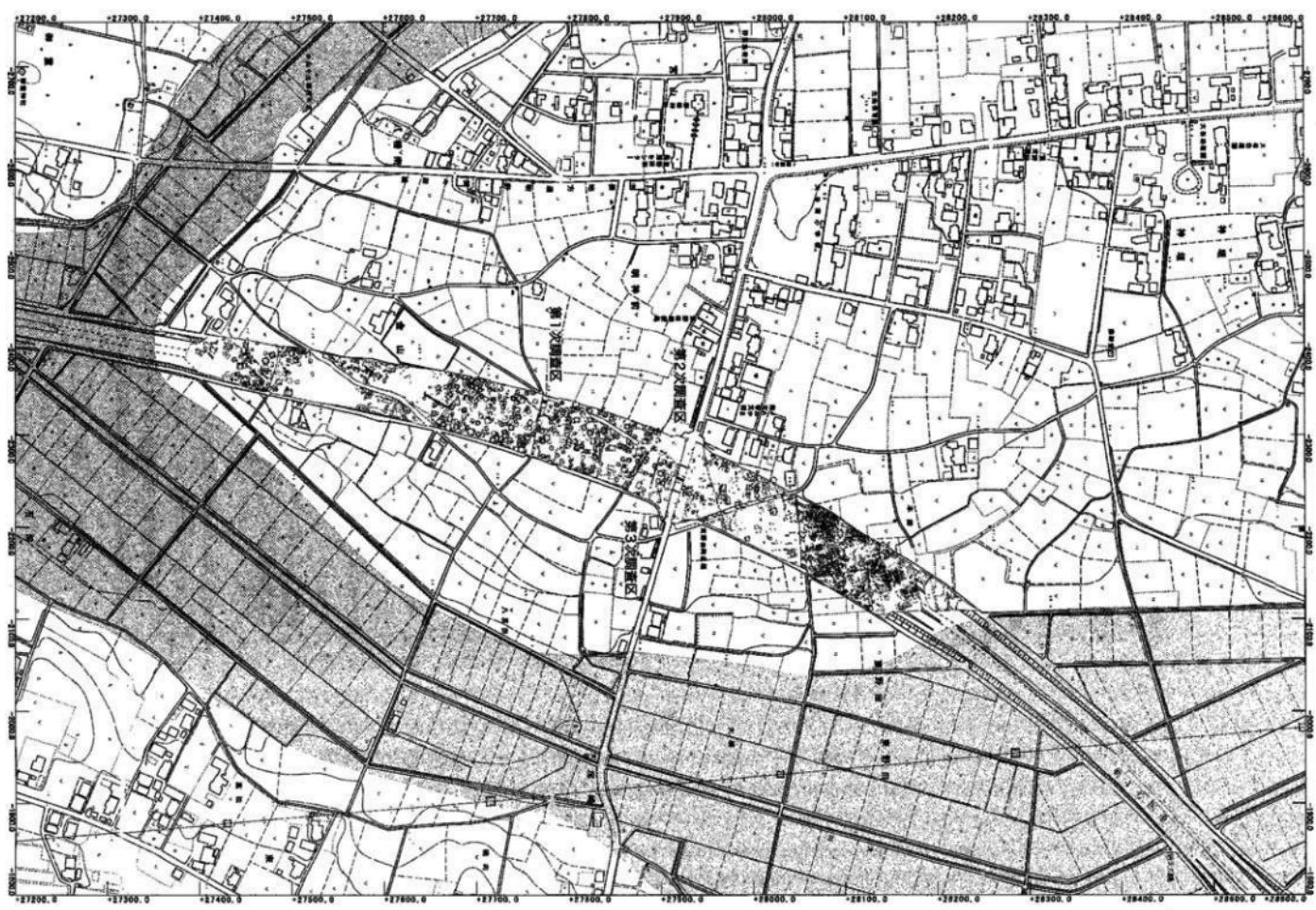
2~13は前期中葉黒浜式で、全体に纖維が多く脆弱な質感を示している。色調は褐色～にぶい褐色を基調とするが、5はにぶい黄褐色、5が燈色を呈している。内面は比較的平滑になでられている。

2及び3は口縁部破片で、端部から内面にかけて、粗くなれでられている。2の原体は無節R、3の原体は0段多条RLもしくは前々段反振りで、原体末端のループも認められる。他と比べてやや薄手で、纖維もやや少ないよう観察される。他に白色粒を少量含んでいる。4は付加条縄文であるが、RLに付加される繩の原体は細く不明瞭で判別できない。纖維はやや多く含んでいる。5~8は単節RL縄文が認められるものである。5は原体の重複及びや引きざるような施文が観察される。内面の纖維脱落痕も目立っている。6は胎土に白色不透明粒をやや多く含んでいる。他と比べて内面調整がやや粗いように観察される。9、10は無節Rが施されているものである。10は細かな白色粒及び雲母をやや多く含み、纖維の脱落痕が顯著である。11は無節Rもしくは単節RLが施されるものである。胎土には雲母もしくは黒色透明粒を少量含んでいる。12及び13は撚糸文が施されるものである。12は撚糸R、13は撚糸Lと観察される。いずれも他と比べてやや明るい色調を呈し(12、13ともにぶい燈色基調)、胎土には石英及び雲母を少量含んでいる。



第19図 金山遺跡出土縄文土器

第20図 金山遺跡全体図 ▶



第四章 調査の成果

金山遺跡は、第1次調査によって、時代や遺跡の性格が多義にわたり遺構密度の高い複合遺跡であることが明らかにされた。特に古墳時代の石製祭具や平安時代の鍛冶などの生産拠点であり、この解明は、地域史研究に寄与するもの大きかった。第2次・第3次調査は、想定される金山遺跡の広がりを知る上で重要なものであったが、生活圏であるため遺構の保存状態は、必ずしも良好と言えるものではなかった。

その中で、律令制下（奈良時代）の谷戸開発による農業基盤整備に着手した時期の住居跡や、15～16世紀の小山氏領域縁辺部資料が断片的にでも確認されたことは、第1次調査区周辺の集落景観を考える上で資料と成り得るものである。特に、集落の縁辺に区画施設が設けられていた可能性があることは注視する必要がある。確認された遺構が帰属する時期は不明であるが、第3次調査4区のSD-21とSK-17・18・19・20は方向性が一致することから、有機的関係を持ち得ていたと考えられる。SD-21は、外側に土を置いて土手状とする溝で掘り直しが考えられる。また、溝に平行し、溝の西上端から等距離で穿たれたSK-17・18・19・20は柵列と見られる。この柵列は、SK-17・18が、土坑の心々で0.4m離れており、SK-19・20も同様であることから、それぞれが組になると思われる。そして、SK-17とSK-19の土坑心々は1.1m、SK-18とSK-20の心々も同様である。従って、これらの遺構は、心々は1.1mで設けられた柵列が建て替え時期に0.4mずらして設置された痕跡の場合と、二本の杭の心々を0.4m一組とする単位で次の単位との杭心々を0.68m離して作られた柵列の場合の二通りが考えられることになる。後者は、杭の直径を0.2mとすると、約一本分の隙間をすらした二本一組の単位を杭約二本分空けて打ち込んでいくことになる。2区西部と4区SD-21付近の傾斜角度は凡そ0.77度で、この東に面する緩斜面は、この溝付近に傾斜変換点があり、視覚的・体感的に台地の縁辺と認識できる地点で、『小山市遺跡分布図・地名表』（小山市教育委員会 1977

小山市文化財調査報告第4集）が遺跡範囲として括った線と一致している。これらの区画施設の時期は、遺物の出土が無いため不明であるが、溝の形状などから古代の可能性もあるものと考えられる。なお、遺跡の遺構密度や時期は、第一次調査と比して薄くなってしまっており、第3次調査区の北約30mまでは遺物の分布が少なく、その北の畠地は遺物分布が多く見られるなど、現在の地形では埋没した谷戸などの存在も考えねばならないが、集落周縁部に位置する土地利用には粗密があったものと見られる。調査中に、平成27年台風第18号等による大雨（平成27年9月関東・東北豪雨）に遭遇しているが、調査区が水没することも無く、水はけが良い土壤であることが確認された。

中世の地下式坑や遺物が確認されたが、それらの対象時期である15～16世紀は、小山氏が14世紀末の小山義政の乱、小山若丸の乱で一時期の勢力を失い、享徳の乱、古河公方の権威失墜、戦国期末の北條・長尾（上杉）などの割拠など、まさに動乱の時代である。永禄三年（1560）以降に成立したとされる古河公方御料所目録の一部「小山押領之地共」（喜連川文書「喜連川家料所記」）には、「小山押領之内野田拘之分」として「野田郷」があり（『小山市史』史料編・中世 1980 小山市）、裏付けるように天文二十三年（1554）十二月二十四日付け足利義氏の野田左衛門太夫宛文書で「小山領十一郷」「野田」が「充行」されている（前掲書『小山市史』）。小山氏が旧領を回復するための動きを見ると、小山下郷として重要な位置付けであったことが知れる。第2次調査区から西約300mに野田神社が鎮座し、小山氏創建社伝を護持するなど、地域と小山氏の関係は強い。小山氏の領域の中で、結城・古河に近いこの地が、中世期において、どのように土地利用されていたかの資料が得られたことは、今後に資するものと思われる。

遺物は、中世の遺物を注視したい。第3次調査SK-6から出土したカワラケ（第15図2）は、地下式坑埋没に伴い流れ込んだ遺物であるが、近接して出土した内耳土器片（第15図1）と同じ層であり、両遺物は同時期性が高い。カワラケは、口径13.1cm、底径4.0cm、器高4.0cmで、底径が小さく逆ハ字状に開き、底径：口径：高さの比は、1:3.25:1、立ち上がりの傾斜角は42.3度である。同様の遺物を第1次調査区出土遺物から抽出を試みたが、同比率のものは得られず、特に口径が13cm前後のものは無かった。カワラケの分類・編年は、当該地域の横倉宮ノ内遺跡（斎藤1995）や第1次調査（津野1997）でなされているが、当該遺物と類似した典型的なものは1:3.2~3.5:0.9~1.2、∠42~43度である。この数値との比較では、特殊性を見出すことはできない。しかし、底径が一般的であることに対し、口径が一回り大きいことが特徴であることは見て取れよう。類似した遺物は、存外少なく、管見では茨城県水戸市白石遺跡「第4号地下式坑」、下妻市（旧千代川村）皆葉遺跡「SK43」からの出土を確認した。何れも当該遺物とはほぼ同大である。特に後者は、鎌倉時代初期から小山氏一族が支配し、15世紀中頃からは結城一門の多賀谷氏が領地とするなど、小山氏と関連を持ち、共通の流通圏内であった可能性がある。白石遺跡出土品は15世紀中頃から後半、皆葉遺跡出土品は15世紀後半の時期が与えられている。また、金山遺跡第3次調査SK-6で先のカワラケと同層から出土した内耳土器片は、茨城県筑西市炭焼戸東遺跡第32号溝跡から出土した内耳土器に類似している。同構造は上層農民や土豪の屋敷跡であり、出土した溝は薬研堀である。15世紀の所産とされる（茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会2011）。このように、ふたつの遺物が示す時期は一致し、15世紀後半以前に地下式坑は廃絶、天井等の崩落した15世紀後半の崩落土坑に流入したことが推測できる。

当該遺跡から出土した遺物は、中世小山氏の接触領域や常陸西部の経済流通圏を考える上で、良好な資料のひとつとなろう。

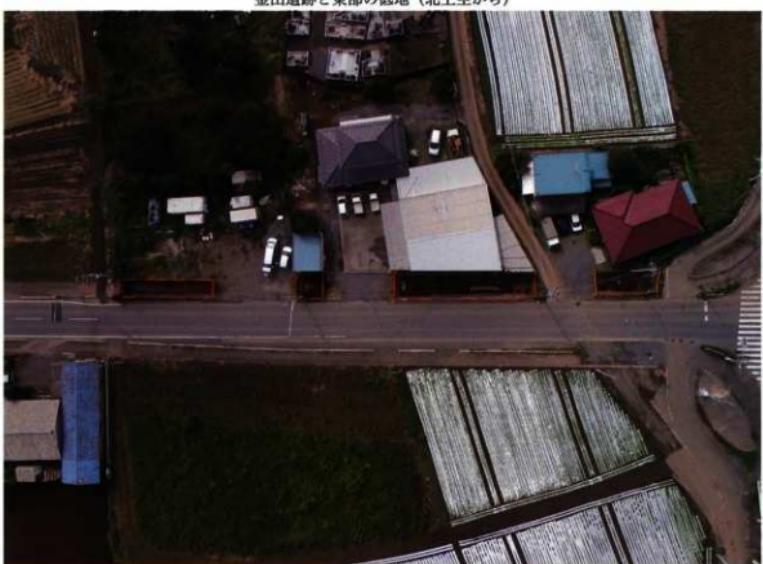
参考文献

- 茨城県考古学協会中世シンポジウム実行委員会 2011 「茨城中世考古学の最前線」茨城県考古学協会シンポジウム資料集
- 斎藤 弘 1995 「I. かわらけの編年」「横倉宮ノ内遺跡」 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 栃木県埋蔵文化財調査報告第161集
- 津野 仁 1997 「第一節 かわらけの編年」「金山遺跡V」 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 栃木県埋蔵文化財調査報告第187集
- 栃木県教育委員会 1993 「金山遺跡I」 栃木県埋蔵文化財調査報告第135集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1994 「金山遺跡II」 栃木県埋蔵文化財調査報告第148集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1995 「金山遺跡III」 栃木県埋蔵文化財調査報告第160集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1996 「金山遺跡IV」 栃木県埋蔵文化財調査報告第179集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1997 「金山遺跡V」 栃木県埋蔵文化財調査報告第187集
- 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団 1997 「金山遺跡VI」 栃木県埋蔵文化財調査報告第188集

図 版



金山遺跡と東部の低地（北上空から）



第3次調査区垂直写真（北上空から）

図版二 金山遺跡
遺構



金山遺跡第2次調査区（東から）



金山遺跡第2次調査区（西から）

圖版三 金山遺跡
遺構



第2次調査区 SI-1 全景



第2次調査区 SI-6 全景



第2次調査区 SI-6 竜全景



第2次調査区 SI-6 竜完掘状況



第2次調査区 SI-6 遺物番号2・4出土状況



第2次調査区 SI-6 遺物出土状況



第2次調査区 SI-6 逸景



第2次調査区 SI-6 作業風景

図版四
金山遺跡
遺構



第2次調査区 SI-18 全景



第2次調査区 SI-18 作業風景



第2次調査区 SI-17 全景



第2次調査区 SB-10 全景



第2次調査区 SB-10 南東隅柱穴土層断面



第2次調査区 SB-10 作業風景



第2次調査区 SB-14・19・20 全景



第2次調査区 SB-14・19・20 全景



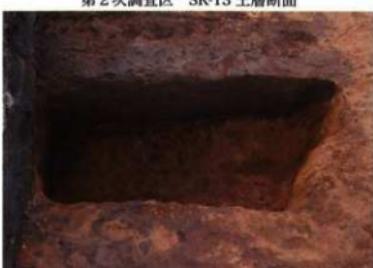
第2次調査区 SK-11・SD-12・SE-15 全景



第2次調査区 SK-13 土層断面



第2次調査区 SE-15 土層断面



第2次調査区 SK-9 土層断面



第2次調査区 SI-7・8 全景



第2次調査区 SK-8 土層断面



第2次調査区 SK-16 全景



第2次調査区 SK-21 土層断面

図版六 金山遺跡
遺構



第2次調査区 SK-11 全景



第2次調査区 SK-11 全景



第2次調査区 SK-11 土層断面



第2次調査区 SK-2・SK-3・SK-4 全景



第3次調査区 SI-22・SK-6 全景



第3次調査区 SI-22 全景



第3次調査区 SI-22 遺物出土状況



第3次調査区 SK-6 全景



第3次調査区 SK-6 全景



第3次調査区 SI-6 南北土層断面



第3次調査区 SK-6 東西土層断面



第3次調査区 SI-6 遺物出土状況



第3次調査区 SI-6 作業風景

図版八 金山遺跡
遺構



第3次調査区 SK-1 土層断面



第3次調査区 SK-2 土層断面



第3次調査区 SK-3 全景



第3次調査区 SK-5 全景



第3次調査区 SK-7 全景



第3次調査区 SK-8 土層断面



第3次調査区 SK-11 土層断面



第3次調査区 SK-9 全景

図版九 金山遺跡 遺構



第3次調査区 3区全景

圖版一〇

金山遺跡
遺物



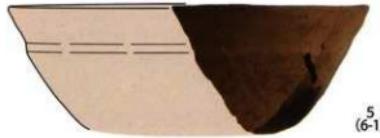
2
(12-1)



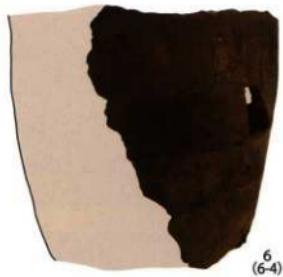
3
(7-1)



4
(15-8)



5
(6-1)



6
(6-4)



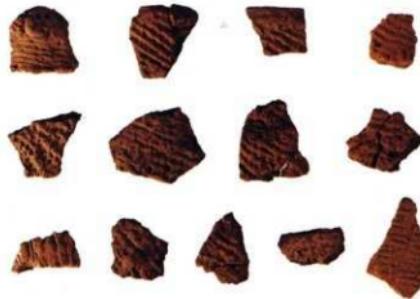
7
(7-2)



8
(15-2)



9
(12-2)



10
(19)



11
(12-4)

報告書抄録

ふりがな	かなやまいせき (だいにじ・だいさんじちょうさ)
書名	金山遺跡（第2・第3次調査）
副書名	快適で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道明野間々田線武井工区に伴う発掘調査
卷次	
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第380集
編著者名	篠原祐一・江原英・岡山亮子
編集機関	公益財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 電話番号0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 公益財団法人とちぎ未来づくり財団
発行年月日	西暦 2016年3月29日（平成28年3月29日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北	緯	東	經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市	町村	遺跡番号	。	°	。			
金山遺跡 (第2次)	小山市 東野田地区内	09208	県7008 市211	36°14'50"	139°48'30"	20100802～ 20110330	968			道路整備事業
金山遺跡 (第3次)				36°14'50"	139°48'30"	20100802～ 20110330	119			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物		特記事項
金山遺跡 (第2次)	集落	縄 奈 平 中 現	文 良 安 世 代	住居 掘立柱建物 溝 井戸 地下式坑 土坑	4 4 2 1 1 9	縄文土器・土師器・須恵器・攢鉢・瀬戸天目・磁器・硝子瓶		
金山遺跡 (第3次)	集落	縄 奈 平 中	文 良 安 世	住居 溝 地下式坑 土坑	1 1 1 23	縄文土器・土師器・須恵器・内耳土器・瀬戸天目・カワラケ		

要約	昭和60年度から平成3年度に実施した第1次調査区の東西に接する道路拡幅部分の調査。縄文早期後半・前期中葉の遺物や、奈良・平安時代の住居跡、中世の地下式坑、集落縁辺を区画する溝跡、柵列跡などを確認した。
----	--

栃木県埋蔵文化財調査報告第380集

金山遺跡（第2・第3次調査）

-快速で安全な道づくり事業費（補助）主要地方道明野開・田舎武井工区に伴う発掘調査-

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田1-1-20

電話 028(623)3425

公益財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町1-8

電話 028(643)1011

発行日 平成28年3月29日（2016年3月29日）

編集 関西とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター

栃木県下野市紫474番地

電話 0285(44)8441

印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
